四季部類

俳諧歳時記新撰部

秋

ゐくゝ人を出せしもの之よつて定まり
起情の備へなる所也

啼くも風に吹るゝ雲雀かな
烏帽子を着も揺汁もる
山を焼すら寒く御戸構する

發句ハ春風に向かふ雲雀の上を言
事を取くら情を起して發句の雲雀
に能この如く烏帽子を着せてし姿を
つくらはしゐるとそく揺汁もむらと協
をお添ゆるなり

抑ゝ三ツ志しを並せ人をとゝめ
て静か寫すあし乳と御戸其
とくふる備ふ此すい三一句の作よしく趣
向のとゝのいにくれ上手の手際也

是も人の備也

あきさつら我笠すかく之也枯尾花
温石のさめてゝなき氷る夜哉
行燈の外よりきゆる海山さ

此發句ハ其角の翁を葬する哀傷

# 俳諧歳時記新栞草 巻之三

京都 山口素揚 編輯

## 七月 い

**池之坊立花**（イケノボウリツクハ） 洛の頂法寺雲林院ハ三条の南六角堂ニ有る也三十三所順礼の一ヶ所ニ近世僧専光数品の花枝を一瓶の中ニして山水の景象を模することを始む後ニ其弟子立花と云ふ例年七月七日立花数品砂の物等会有り是ニ星ニ供する意なりとぞ

**生身魂**（イキミタマ） 蓮の飯、刺鯖、［閑窗倭筆］本邦の世俗七月さかまきハ生る二親を供養して生身魂と名く是も盂蘭盆の修行ニ［盆経］願いくは現在の父母をして寿命百年病なく一切苦悩の患なくらしむ是七月十五日僧自恣の日現在の父母寿命長久を祈る発願の文ニ是生身魂の修行一［動静三才図会］刺鯖中元の日諸親相贈る但し背より磯てく割牙きこれを鮑ニして二枚をつ重とあしまゝを一刺とく○同書ニ云蓮の飯ハ孝姚の思ひ旃ゝ供し又以ゝく

の吟ニワキニ意を寄せて温石さめてくるしき旨を物の声と作門人の鬱腸を述るなり

第三一時して蓮泊を作る西国の服の一作を言葉の略也くさんの元也くさく蓮図をくるくるおのれ出ものとして一句の低意第三の手柄ニ

是作者金釈ニ 発ワキも有るべきはあり

中ふるさとも春の紫穀の芭蕉ふる
末摧の外も垣の冬引菜
鈴の恵都い角ま田中くん

発句も秋風を吹きくる芭蕉を吹きまくく春の紫穀と作をしまた摧外垣と陽をよせ合せくく冬引菜と西蕉せしく一句の低ニ

脇第三垣の外面の菜畑とくく塀ち人性を起してあくるも近き所西まく田せ一魚あるゞ都の方まく下座月の東越て田中くんと遠く親戚ニ賀るを礼式ともとをを祝して生壺をとい荷の葉を以て煮せる精飯を包ニ観音の子を用て長を繕る佛名を以て好よるる

**稲妻** 稲つまと、 和漢三才図会 秋の夜時々ましくる、

電の光の妻ニ俗伝ニ此時稲実る故ニ稲妻の稲更ニ妻の名あり 御今 稲光い雷ニ 源氏 電い陰陽の激曜也

●稲の殿、稲妻ニ対して言葉ニ 稲の殿一束

**稲の花** 夫木

続猿蓑 稲の花く苗穂ニ稲の殿

ゆつくく稲いみ花ゆるしく我家の門田の稲社ニ
浪くまく 後ニ我内大臣

●稲の葉の雲、稲の葉のおとと
ふの乳ゆるる系
麦をくふくふとて

**隠元豆** 大和本草 近年中華より
くる豆子を拙、秋実多
く花咲ニ夢生を嫌きと記英ともニ豆ニ今ニ名琉此ふて
南京豆ニ又〇此時芙蓉隠元豆ニ称し来て浜豆を
持来しもニ一種ニ九ニ
豆ニ名つく

**蝗** 本綱 蝗蟲い惣名ニ数種あり其数土中ニ乳む

**蝗虫** 大和本草 蝗又菜の葉ニ青虫生ニ蔓藤ニ
はまるい大なる拇指のごく長さ三四寸ありて芋
中ニつふまれ色又褐色ありて鳳蝶ニなるまり

**蝗** 本草綱目 蟲蝗集
赤蝗ニ類して飛ぶ性金の声を畏る一度ニ八十一の子を生ま冬
大雪ニ凍死ニ紀ニ土ニ入ると死ニ又和俗実盛虫ニ称ま

**稲春虫** 和漢三才図会 俗云稲豆拇ニ似ニ蟷螂ニ似ニ長さ
一寸ばかりの色社人烏帽子を着る状ニ似ニ故ニ俗ニ称
豆ニ云ふ児両足を捕ふまい身伸し腰さ仰く稲を春く

形ニ似ニ故ニ稲春ニ名ふ

**蝗** 本草綱目 蟲蝗集
解ニ云蝗赤蝗ニ類して首ニ王字ありて冷ニ生ニ田ニ所
後ニ化して鳳蝶ニなるまり

**芋虫** 大和本草 蝗又菜の葉ニ青虫生ニ蔓藤ニ
はまるい大なる拇指のごく長さ三四寸ありて芋
中ニつふまれ色又褐色ありて鳳蝶ニなるまり

**芋** 時珍曰芋花ニ子ニ成ニ或ハ七八月の間ニ花ニ成ニ
茎ニ蔓生ニ葉ニ長き蔓ありて巻ニ蓮花の状ニ似ニ
甘藷ニ芋唐の芋青芋螺芋

**犬殺梨** 和漢三才図会 ゆ玉最多し
真弼津時社田の産地園ニ信して大多ニ周ニ一尺四五
俗ニ云犬殺ニ云狗子樹下ニ食ニ時梨ニ食ニ撲ニ死ニ

**色草** 秋の千草
茎蓋生ニ秋茎を抽んて花穂を出ス

**糸芒** 葉細

**黄三秋物**

**稲** 禹錫食経 尓雅ニ云稲い稌ありニ

**鰯引** 裂鮫、 和漢三才図会 鰯俗字

故ニ名く



○文字留第三之事

霜月や鶴のはしくく並れかく
冬の新月のあさ孔雀の
裡捨山家の体を水墨画

発句ニ鶴のはしくく並れかく
ニ又ニ声
ニ服あるまるニ云ふ
まく留くるまりまく紀之
脇字

此句ニ三ハ留りよの常まくい三句のつ
ワキ冬の新月ニ出ちり初三句一意ニ
ゆくく冬尾して第三作合ニ
ひもなきぶふつつ新月ニ
たるまるく裡捨くつふ常盤木を
らん山家の体を水墨ニ
ふしまくまくせいい第三の
て留りも珍しく三句の裡捨ニ
視くり裡捨として下ニ水墨ニ

なくなを用て可なり

○暑中連綿の事

前

山田の山田社の稲を刈ける
夕月さやかなれば漕る四十雀

是は暑毒を延まゝに云なり彼八俳
さいふ時節なり

夕月年ゆく秋の漕る四十雀
秋をまねきて出る戸の傍

是は暑月の前の白のゝしきまり人
情を向ひなく情を起し喜る俳
き八俳白観者

秋をまねきて出る戸の傍
目塞る苦き藥をまもる

前句秋を知るとなつかしき戸の傍
ゝ句を詠ん人とるなく
起句をるなくなるものなり

鰮和名伊和之性柔弱故に俗字弱に以て與和之と訓
乃ち相通の中略拜行して重る海産猶柔し但人
緣知して網を下し獲る鰮好みて鰮を食ふ嘉遊
いる者数百群をなして浪間のゆしを見る如して
膳に供らて名らふ又時を以て盛由とす○鰮引
る網を引の義張捨てゝ魚の思力を用いる友
いたして捨を以て解く故に別張捨と云 本朝食鑑 一名
鰮雲 秋天鰮見るゝんとまる時一斤の白雲有りて雲段
さとして波のゆしゝこまを以るゝこまを以つく

## ろ

**六道参** ロクトウマイリ 九日 迎鐘、 山陵考略 云送
模賣、 名五条遍化寺の所の

東に向のるゝ遍化寺大昌院と唐も素仏堂有る是移堂なる
の布施をもとゝ
元年葬場の中堂に地蔵を安置せ傳らる所眞遍に通せ
故に少移堂此所より親らに云道に行る因縁なりと是因
く毎年今日参詣る堂を迎ふ種を精進を迎
種ゝ云○名家抜の華買て戻り佛前に供ゝ
ロクサイ

**六齋念佛** ブツ 毎年七月盆会に近在の農
民紙を敷ちゝ市街

附ハ八俳ニ曰ニ人ニ

目ふされて苦き藥を製る
山庵へ戻る風呂敷を文
隣ゝ聞くまる色のまる油蔓

是人は三句ニ作る俳之前句ハ
ふし社人の用ニ云用を云ふ書庫
ゝ云物う者詩を来すかしと
人待用を受ゝ後句ニ油蔓と
蔓句を立一句の俳を隣ゝ書
多の事を起してまるゝの二

是七名句附ニ

隣ゝ聞くまる声のまる新油蔓
三尺つもるまるのなそれ

是ハ油蔓ゝ云ふ時ゝ
られ附ニ三尺隣ゝ聞ゝ云ふ
一句の俳まり

是七名ニ曰ニ歌ニ

民家に持る是を云ふ念佛と云維新後箱中止を
明治年四年七月元の如く出る則藝人組れを受る新中
佛を用町の云斎
墓参 ハカマイリ 十五日より十六日迄て墓参詣考の墳墓に詣ゝ
和漢文藻 影唐山の人情明の日上墳祭掃に如し
かゝ多ゝ一家ゝ系牡ゝ墓中ゝ髪の墓中ゝ
文彩を行ゝ書物ゝ蕉庵ゝ俳ゝ蕉庵ゝ
の字を以ゝ墓ゝ切字の入ゝ
初鷹 貞徳曰ゝ出の鷹ゝ初めて見ゝ鷹ゝ文初鷹
ゝ夜ゝ出ゝ

**初涼** ハシメテスヾシ 王劉鏘詩云昊天
旦高秋瓦發初涼

**鳩吹** ハトフク 鳩を吹ゝ盆の盆灵の著ゝ
ゝ出ゝ著ゝ中ゝ

**初雁** ハツカリ

三尺つゝきのうるそう迄
鍋を鍋る狼うなつき恩みん
兎唇の書の只まきゝ法

是まの白き三尺の書と云を鍋に鍋る
鍋く鍋向を有く日書うくゝえて
恩ゝうんと白低せ一次の白い
前を撞人とゝくゝ手書を向い
し兎唇とせしい撞人のゝ
せまり只法きゝまくくと撞を
鍋しゝい南美う鍋せを撞る
業名書名も此撞まかくゝうゝ
ゝゝ鍋撞も鍋えゝ紀事ゝと
ゝゝゝ手の留守ゝ法所る体に

是まの白を撞して撞の向撞に
ゝくゝの書の只法まの
鍋鍋ある花の仰寺髪蕾て

是も人撞三白ゝうてゝゝ二れ越の人い
ゝゝ二まの白の人い書に書の田を
自ゝて撞ゝの二撞に白の鍋向ゝ

説是ゝ
同ゝ

**萩** 和漢三才図会 枝多く長く垂地を掃ゝ東の刻ゝ似く秋ゝ秋ゝ
花を着津是ゝ兎ゝ云へり如し掃まるに
苛り山谷ゝ有ゝ所ゝ多し 大和本草 萩の葉名
花紅ゝして盛ゝし ● 萩殿、萩の戸、 枕草子抄 萩の戸は常
の仰所ゝ多し 大和本草 萩ゝ根ゝ紅色ゝ秋の花ゝ葉を載らる
清涼殿の西の方貳間の所
● 蕉雨亭手書、古殿茅、萩の異名

**花火** 和漢三才図会 燈燈ゝ代ふべきものゝ
又文月河辺掃ゝ奥ゝ 四季花を採ゝ

**蓮の實花** 蓮頌曰 ゝ菊秋
蓮荷ゝ去ゝ異名蓮の実の房中より抽ゝくる穴を載
蓮荷ゝ去ゝ異名蓮の実の房中より抽ゝくる穴を載

**泥蓮** 和漢三才図会 山のゝまを覆ゝくふ
医書ゝ山蓮不ゝ山のゝまゝゝ是ゝ

**絡線虫** 蟋蟀の中ゝ多ゝ
七月中ゝ
しゝ二の手の中ゝ
山雞ゝ入有ゝ
音ゝチョンハ

今初秋以後多ゝ
吸風を俗ゝ
ゝ

ゝ養ゝ盛ゝ
ゝ手ゝギイ
ゝ打ゝ
ゝ俗是ゝ
ゝ蛩ゝ
ゝ機蟋
ゝ打音ゝ
ゝ又ゝ

ゝゝゝゝゝゝゝ支離の女をゝ
ゝゝ世の中ゝ
羅障消滅ゝ
ゝ髪をゝ
意ゝ
ゝゝ只ゝ
ゝゝ起ゝ
ゝゝ

の屬長さゝ三四寸身ゝ渡て方ゝ首両顎ゝ眼ゝ目
の上ゝ二ツの髪ゝ翅ゝ長ゝ赤ゝ黒ゝ背脇の下白ゝ
跳ゝ捕へゝし

**櫨** 和漢三才図会 黄櫨ゝ芙ゝ
子乃内袍芙櫨條ゝ
花ゝ
ゝ秋ゝ
ゝ紅葉ゝ
ゝ子ゝ
ゝ葉ゝ
ゝ

**蓑ゝ秋物**

**蕉芒** 袖中抄 花芒ゝ

**花野** 子草の花野ゝ
野体ゝ
耳ゝ

**芭蕉** 大和本草 本草綱目ゝ載ゝ

四季 非皆成詩記所載章

附合 七月 付記 百廿八

妻の行来る此西へうつらふく
旅登庵の隣青ろまむ遠方之

是前句ハ種供養の花の寺に
妻の夕暮とみしきさへく附流し
たる逆句なり

次ぇ前句ふるくとりふ句をとりまして
西海寺に隠れ子家の面影を附し
又此くる妻のり来るとりふに霊あむ
わちろうく句を結れしうおも
の残映を合せてりふたのあるを

是素竟か末に添て附る
入体之句法也

○

前
見ささしあへる文 霞隣
見し悪の児殺も出よ堂供養

是前句見ささしなるら之とりて
時のうつまへくうしきさお殺ハ堂供
養の場さ集りある縁取の前として
秘見し悪のとりふかくりくえそめる

三才圖會

三才圖會 弾塗魚、俗ニ波世川の来り近き所こ多くあり
常におに庭を潜行小鯛を以て餌とまてつる[illegible]の諸を
去りとて二三寸許の[illegible]給の鐘を附鞘をと着しむ
響をを候く竿を揚く秋月貴賤以て遊興の一と
に形を竜鯔に似てふし 虎沙魚、
袖沙魚、等の種類あり

## ㊁ 庭の立（ニハタテ）

## 琴（コト）

江次第 云 竹莫蘆所より箏一張を申下し東北
西の机上の書に遠く註之 延喜十五年の例 和琴
を用ふ裏書云柱を立る三様あり 常ニ半呂半律
を用ふ秋の調子なるを 文華秘原 半呂半律とも 樂書
まと云黄鐘調大食調也
律呂の調に半律の調あり

## 新綿（ニヒワタ）

泰阝之学 は七月十六日より九月
内裏の貢の綿に○御料に貢ます
うきさきは八作者おらくろ遣し

## 二百十日 舊 正

月の節立春の初日よりかぞへて二百十日といふ此日
秋の最中にて金穀の気変動ある時に故に必風雨
あるも此時分中稲の花盛ニ当る花
のさかりなるを農民おそる

## 廿六夜待（ニジウロクヤマチ） 東武の俗

今月廿六日の夜月の出るに三尊佛の影向を拝とて
高輪に釋集り此夜手踊又藝さまざまの仕組者あり



児の入ぇ供養の義式に定めし遊んだ
く出ろまで[illegible]
情を起しまて[illegible]出きしいふさき人の
ん様子知之句作之

是七名之句 契情之

見し悪の児殺も出よ堂供養
浅ふかきもにきかる人晴之

是前句の児待人を女として姿あると
見川たるく旅へ出るく縁を越向
にし相待ふまさく[illegible]人とふいふハ堂
供養の場の縁集して[illegible]
見るけき中あまハ人の髪に障るも
何もあの因縁を知しらん相女の情
として姿に障ふるをおまくさらふ
趣を一句に作せし之
人情きありと縁ふいえ[illegible]
と情にある深き句之

是一句之自他の句ある 有心附之

はふりまに障る人憐きあり
なきましの晴まする世のいと紀

是を一夜の契とい云河勝ニ月を待[illegible]
幇間虎八云土人廿六夜[illegible]
審あらは近むらし近村の民此日に東り海岸にはまりて[illegible]
菰を刈取日庭にして月の出るを待しとして今更
其形の蔽ハ菰を敷物に
変ハその名残ありといふ

## ㊍ 星合（ホシアイ） 星の契、

齋諧記 天の河の東に織女あり乃ち天帝の子ニ機杼ニ労
役して容を理る遑あらず天帝其独居を憐み
河西の牽牛に配し嫁せしむ嫁して
後竟に女工を廃す天帝怒責て河東に帰らしめ
唯一年に一會せしむ ● 星祭、● 星の手向、周處風土
記 七月七日の夜庭を洒掃して案に几筵を施し酒脯時
の菓を設香粉を河鼓織女に薦し云 ● 星のかし物、貸
小袖、曝衣裳 四民月令 七月七日 経書を作る 藍丸
曝晒を合し經書衣裳を曝し俗に[illegible]
● 星合の濱、 歌枕の井 伊勢の濱にて星の逢ふなるを

## 本願寺の籠花（ホングワンジのカゴハナ） 七日

紀事 此日の晩東西本願寺末流並家
礼花数種を以て船の状を造り人槽の形を作り中に寺
花数朶を建て御門主に献もこれを堂上にならべおく

此句は、ゆく水のふへし打越の句にて児稚を出しよくふまへて付句して見るに二それにつゝるをさせまる人と付て一句の趣向を立る也は其人に向ひして、……世のいきさと語るをまて變に世のいきさを殺しても……世の句を残して二句の輪回を避る二世の字拾く 大事二

是前句の情を押出して云……

十五夜の……世のいそき　志ま……番場松本

志ゝ……松本は大体と……世の急……暮砧急……附物……

是八体 白其時節二

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 今日綿人是を……。**盆市**（ボンイチ）草市、荷の葉賣、麻からうる。[紀事] 七月朔 | 市…… | 蓮、…… | ……是氏間…… | 二三尺……作鏡……**鳳仙花**（ホウセンクワ）時珍曰……頭翅尾足具 | いまり……五月……紅白の二色ある大……放…… | 聴し七月花…… **木瓜の實**（ボケノミ）[和漢三才圖會] 世…… 木瓜と…… 草の注に合 | 是……武州…… 唐木瓜……あり人 | 是…… **鬼灯**（ホツキ）[同上] ……白花…… | ……寶去室殻として……舌上……音 | ……**南瓜**（ボウフラ）時珍曰南瓜の種南蛮より出……四月……苗…… |



志ら……番場松本
鷲鼻の指組かな秋の庵

前句の……定め……鷲鼻……前句の……秋の……

是八体 白 二語二

鷲鼻の指組……詠の句
……と何……向ふる

是八体 白 近白二四五句の運ひ……變……世の……鷲鼻と人……秋……一句の趣向二

○
前句
まの……畳……出……

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 蔓……○一種南京瓜一名東埔寨（カボチヤ）又唐茄子、……南瓜の…… | [蕪三秋物] **星月夜**（ホシヅキヨ）[まくらせめ] 星の……夜を云二 | [季二] **へ** [季三秋物] **弁慶草**（ベンケイサウ）[和漢三才圖會] 景天和名以 | 岐久佐、俗云弁慶草、……景天……枝を……便…… | 景天佛甲草ニ似て……是を折取て……弁慶の…… | ……名ともボ……以岐久佐……字訓…… **布瓜**（ヘチマ）時珍曰……黄花……徽胡 | 瓜ニ似て……具……長さ一二尺……瓜……首のし | **と** **たなばし書**（ツマ）……の字……の義二……婦 | しき書二……織女年二一度……[一切經音義] **燈籠**（トウロウ） | [紀事] 盂蘭盆又……作る火の……二元火を盛…… 元中元……寛喜前後二起まり |

二の尼が近き霊にかくるゝすゝき

是前句ハ昔をなつかしく思ひ出て古きたよりの紙など取出しみる体を大国に有し人などの今ハ世をのがれて都近き庵りに住るさまありさまと見返して作を附たる也

作に云人二

二の尼が近き霊にかくる住

七つ限の門たゝく音

前句尼といふ事より趣向を定め七つ限の門をたゝかせたる一句の作一

是八体句にて場二　叩くとおの時を起す

七つうきまでの門たゝく也

前の話は鼓の糧也あてくり来女

前句七つ限りに人を通さぬ門といふ（関）て軍用の粮と趣向せしものなく（通）の〔ことく〕せしを二句の作なり

前の俳に鼓の糧やあくる也来女

頭（ツムリ）をたゝむ能登の海人

前句の兵糧を運ふ勢ひを海人と定めて頭をたゝむ意にして其中の趣向なり能登とせしハ一句の作にて〔此〕句の附ハ前句の兵の糧（カテ）の意を取て一句の作なるに此の編一句の作くらべしたる所考ふべし

頭たゝむ能登の浦人

女舟のふりきりたる我見返して

前頭たゝむといふ人我ありして舟と仕物を定めたるもの〔こ〕く浮き浪と一句に情をもたせ見返して海を揺る一句の作なり

是案者ハ有心にて附たる其躰の〔こ〕る人なり

女舟の浮きたよらさを見返りて

虚形にかゝれ実の姿くたゝ

前句の恨みを〔き〕とらる〔を〕人に附たる舟を見返し〔お〕妖なるにお悩る宮女と趣向



---

**鳥屋勝（トヤマサリ）**　鷹新毛を生し羽異なる

〔定家卿明月記〕近年民間に鳥屋を建て多く雞を飼ひて遠近の人ども〔あ〕つめて流養を設け紙を貼し挙て遠近に名を得るもの〔こ〕とく星をて似せたり○〔こ〕ろ鵜の〔こ〕く鷂〔ハ〕鵜〔以〕〔鴐〕きりたるか〔鷂〕是ハ〔鳥〕全く備はる鳥を出する時遠勢持てる〔を〕事ほしこれ鵜〔を〕あそ〔ひ〕保とせり○去年よりハとや流さるとも紅白〔に〕して

**蜻蛉（トンボウ）**　秋津虫、あけろふ、やませ〔の〕〔栄華〕〔紀年〕

〔蜻〕むくまの秋そ〔を〕ふしき　定家

神武天皇高きに登りて此郡の形蜻蛉に似たるを以て秋津洲と云ふ〔和訓栞〕〔か〕けろふのあるあきつとハ〔中〕略〔か〕〔く〕る蜻蛉をいふ中略〔水〕辺の虫なり〔こ〕ととく〔卵〕良数〔ハ〕とてはに〔点〕し〔閃〕てと電のことくかれハ陽炎に〔比〕して〔いく〕〔あ〕る〔を〕〔和漢三才図会〕蜻蛉ハ〔惣〕名にして大くまきを〔寄〕るとの須〔雑〕一名玄〔雑〕かくして〔黄〕〔色〕なるの〔鬼〕やんまなどて玄〔緒〕あるの胡黎一名〔江〕雞〔か〕して〔黄〕に赤卒ハ小〔く〕赤き〔を〕のなり

**富草の花（トミクサノハナ）**　〔風俗〕〔句〕〔富〕くさの〔を〕る〔と〕ところ〔を〕さのもあてくつく〔る〕〔へ〕くこそやまくまゝらんさに稲の花を〔い〕ふなるべし

**瀬桐（タウキリ）**　〔大和本草〕倭俗唐桐といふ〔高〕さ二三尺〔ハ〕〔を〕〔江〕〔戸〕〔に〕花ある〔く〕花〔繁〕〔多〕にして〔盛〕久し

**蓖麻（トウゴマ／ヒマシ）**　〔わくかいわ〕　和名唐荏　又〔か〕〔ら〕〔え〕〔ご〕〔ま〕しハ葉大〔麻〕のことし〔高〕さ大なりよりの間花穂を抽て色〔あ〕大〔に〕〔こ〕る〔か〕大〔き〕〔文〕〔余〕に及〔ふ〕〔ハ〕〔実〕ハ大毒有とそ

**番椒（トウガラシ）**　天　〔〕　〔蕃〕〔一〕二秋物

〔和漢三才図会〕番ハ南蛮の義也俗に南蛮胡椒今唐芥子〔と〕二月種を下し葉〔節〕のあしして小赤胡椒の〔実〕の〔如〕〔よ〕〔く〕似て〔か〕くら五月小白花〔を〕開き秋実を結ふ○秀吉公朝鮮を伐ときに彼国より渡る故に俗に高麗胡椒といふ〔高麗〕胡椒の一種天〔守〕〔番〕〔椒〕のー種ふ●下弁守、番椒の一種とくくく上をむく故に名く

（ち）

**中元（チウゲン）**　十五日　〔修行記〕

七月中元ハ大慶の日道書に云七月中元の日地官下り降て人間の善悪を定む道士大聖普く宮中に〔き〕〔し〕道士〔と〕夜に〔き〕て経を誦し十方の大聖〔に〕として云〔哭〕篇を録し〔餓〕鬼〔囚〕徒〔を〕まて解脱を得せしむ〔五雑俎〕道経に正月望を以て上元とし七月望を以て中元とし十月望を以て下元とし遂に三元三官大帝の称〔ある〕是俗〔説〕〔の〕〔こ〕かし〔き〕に

**地蔵祭（チザウマツリ）**　廿四日　〔紀事〕〔洛〕外六所の地蔵詣あり、御泥池、山科、伏見、鳥羽、桂、太秦、是也、六一日六所の行程十四里に文徳天皇仁寿二年小野篁地蔵の像六体を造りて木幡の

し書顔に髪のこゝろをうきたる絵をと一白の作にしてくふくたにしくふい髪髪のそらけたるをそ侯氏あぢに書くかゝ相あり

是陪る起句

あ白くかゝる髪のふくたにしと泊しと代りて家紋まゝ如んん

前白の人をゝ〳〵ていくかしと酒を働ゝくく返ゝあゝ代作せ〳〵かし つきゝ人を射〳〵て酒〳〵の二或き。 経シ百姓白業務ゝまり自のゝ云ゝ くくゝゝ如らんと前るる所俗ゝり きゝ〳〵るる根あゝ一白に自他ゝと 答テ白代りくくゝゝもしくゝ自分れ あゝ つくゝあきんをふくゝむ盛をくくゝ くくゝ如らんとせ〳〵二ゝくく俗詩の酒 白らんとゝるるゝ心〳〵てえゝ 彼中古の遊ゝゝや古風のはいゝんゝ ていゝ踊ふ事くくそ

是前白の詩をゝゝゝ署ニ向酒ニ

○

はゝ山大善寺ゝあ置を故ゝ井戸をゝ地蔵村くゝ 壬後保元二年平清盛ゝ所堂を造ゝこ長戸ゝ玉 七月廿四日供養西光法師ゝ長戸ゝ行ふゝ主て毋日 者等地蔵菩薩を修ゝゝ所くゝも辻地蔵を祭りて願きニ

## 古語

**大和本草** 白蓼本草ゝ蘋須云蓼蓼を甘ゝ針のゝし俗 ゝ針とゝゝ小児好ゝ食ふ毒ゝし血を破り血 を止む 是ゝ

**蟲** 虫 きりゝもの 呉多ゝ

**兼三秋物** 蓴 ちゝや

**の** 琉球芋

**大和本草** 甘藷葉を番薯 又蕷葉ゝ似ゝ根ハ瓜蔕根 ゝ似ゝる根の下ゝ短き蔓ゝ根の節ゝ毛 の末疏飛ゝり護刎ゝ護る懐土ゝゝ寒地ゝ生ゝ

**兼三秋物** 律の調 楽隠曰按ゝ律十二有 陽ゝを律ゝ陰ゝ黄鐘、大 簇、姑洗、蕤賓、夷則、無射、陰ゝを呂ゝ大呂、夾鐘、 中呂、林鐘、南呂、應鐘、是ニ名けゝ律ゝゝ○貞徳 曰律の調ゝ秋ニゝ呂ハ呂の声ハ寒ゝ秋ゝ 是ゝ秋ゝ法ゝ秋ゝ呂ハ雑ゝ

**四** 兼

**三秋物** 零餘子 野山薬ゝ草蘚ゝ蔓薬 の形状混雑して分別し



前白

頭痛をしのふゝ事ゝ日の詩

鄙人の書ゝゝられ旅の事

前白夏の日の四ゝくくゝ暑ゝ仙ゝ 楽ゝ〳〵ゝゝ〳〵ゝ暑ゝ詩ゝ の人ゝゝ迎ゝく傾城遊女ゝくの田 本ゝ客ゝ酒ゝ歩ゝ遠き國ゝ連 ゝれゝく古ゝ流中の体ニ

是陪ゝ古人ゝく王昭君ゝの体ニ

鄙人の書ゝゝ旅の事

水ゝ酒ゝ酒屋一軒 蓋紳の粉ゝ東ゝの粉屋ゝく

前白ハ方丈の縁体ニ古詩を陪ゝく白 の題向ハ酒ゝ五ゝ五ゝの家の流れし 中ゝ五ゝ一軒のまゝし酒屋のある 体ゝ

次の白ゝ古ゝ城現在にして夜 明ゝくゝ中ゝ水を引ゝ酒ゝ ゝゝ流れ酒ゝ家居のゝ白ゝ 迎ゝゝ庭ゝを電のゝゝを ゝ向ニ掛ゝ元旅の粉ゝ一白の作ニ

かゝし草蘚ゝ草蘚ゝ零餘子ゝゝ山薬ゝ 説草蘚ゝ草蘚を紅ゝ山薬ゝ山薬ゝ夢薬ゝ 草ゝ夢薬ゝ花白色蔓を草蘚ハ 醇ゝの濃可を平らげ軍士ゝ ゝ遂ゝ世ゝ行ゝ子醇西人ゝ對陣せ〳〵時軍士百 余人ゝ命し ゝ虜見ゝ 戯ゝ楽人雑劇を除して跳躍をゝ世人皆見て 微ゝ〇本紀の俗七月十四日ゝ晦日ゝ五ゝ海夜大人 ゝ見街頭ゝ踊ゝ ゝ踊ゝ〇懸踊念仏踊、髪自踊、盆踊 仏踊、ゝ踊、ゝ踊、七夕踊 ゝ踊ハ以字ゝ分ツ

**を** 踊 書言故事 王子

**麻** 麻柯箸 聖吳ゝ供ゝ箸ニ 演繁義 かゝ 時珍曰大麻ゝ 麻ゝの箸ゝ 惟然〇 麻ゝ虚濁心ゝ

**女** 即花。茶花

女陪之山茶ゝ是ゝ二三月人茶ゝ 蕾蕾の茶ゝ似ゝ 蕾の茶ゝ 蕾ゝ 葉ゝ 葉三七月前故の葉ゝ似ゝ細く長し七月蕾を 生ゝて ゝ葉ゝ 葉細小正茶ゝ葉 愛まぐし本紀文雅ゝ 向ニ花を ゝ

是八体句時分項ニ

　萩神の杉ゑ夜明の鶏鳴して
　　薬師の庭術神くり安家

是前句の表明時分なる見込して該当
薬師使を趣向を定め親家をなる
体を一句に作したるなり

　薬師の瓶拾をのせる
　保昌の任もはや過ぬらん

此句保昌は丹後の国の守になりて
下りし人なり昔は一任とて三年
をもて都より国守をかへ給ふ事
有しとぞ（今云縣令の任ナリ）
附の意は前句の薬師使を丹後より
来りたると見込て保昌の任あきを趣向
とし前句に年の暮を付る句作を
むかしはなか半やるりゆけるとせしに
此句の留は上てやと疑ひて下さらんと
なく定りたる法の通りにて論ず一句の決め
附て有る趣向なり …

源順詩云如薫粟俗呼為女郎者是之 隠くる子を結ぶ花白き者男陰之といふ

**萩**（ヲギ） 萩の風、萩の声、
大和本草 萩は … 中に実なし少しく …
萩の葉は上風とも …

**翁草**（ヲキナクサ） 大和本草 麦門冬の一種にて葉大葉の麦門冬に似たり …

**弟切草**（ヲトギリサウ） 薬師草、… 和漢三才図会 初生 …

又薬師草ともつく

**旋覆花**（ヲグルマ） 蕭頌曰二月以後苗を生ず多く水の辺に … 花は金銭花のごとし … 夏ニ秋ノ物

**鬼芒**（ヲニスヽキ） 時珍曰葉芽の如くにして長さ … 快利にして人を傷るし …

**小田守**（ヲダモル） 山田守、小稲守、… 人畜の傷を防ぐに …

## わ

**早稲**（ワセ） 時珍曰七月に熟する者を早稲と云 …

**童相撲**（ワラハズマヒ） 扶桑略記 延喜元年七月廿八日童相撲廿番 …
延長六年七月六日童相撲二十番 … 夏ニ秋ノ物

**綿取**（ワタトル） 和漢三才図会 … 中に白綿を出す …
車をもつて中の子を揉去り …

**若煙草**（ワカタバコ） 同上 … 以長崎の東の土山に植二月種を下し …

西園の手形受とる小日の書

赤白蓮を分ちて以て栽とる小の樹
うしき体を西園に展なるの書うく
の蓮さしてく作り好り

是 手鞠 二

西園の手形受とる小日の書
貧しき葬の足さやうの

赤白問屋の表口の日の書付ぶとる
込て葬禮を通まるう蓮向あり
足さやうしやうの美しきと
ふこもれたる一作 二

是時分 二

貧しき葬の足さやうの
庭例も野川流る秋の風

赤白の一体なる足めて野辺近き
庭ふ町と蓮向し秋風い葬禮の
よ繁でしてこの何をなる八月秋
の夕書の白しき二白の書を年時書

五月稲し拙新黄を摘去る実を除くとて毎日怠
るべからず行こるき三四尺人葉南蛮に似て長大七八
月葉を乗る葉蓮を度て去る然れさし盆一宿
く取出し一葉ごとに濡ぬさを編むが如くして晒し
乾し一夜寒宿して後晒し乾も黄赤色
となる敷を換け是を和むを若濃多是

## か

### 梶 カジ

年浪草 和俗七月六日市中に翰の葉を売り晒
夜法ふを書く以て二星に供する所あり

## の葉

又類冊に嶽の葉を用て詩歌を書く○菅車長稿に朗詠
抄白昔年五月の海に天人下る羽衣を掛所に盥すきん
ぞ弾琴の書とある年月を経て羽衣を取て
天上し再び人界に下る掛琴と共に天上も女織女と
ある男い牽牛と為ると毎に天に上るとき梶の木の上に
為を取し是を取付て登る故に二星の手間に梶の葉を
用に願の為ときく安倍の為を用てこと
此事 清原為忠も見てこと晒し寄記

### 烏鵲橋 カサギノハシ

藻汐草 鵲鵲記に云史記に云嬢に夫婦有り夫を織子と
いい婦を牽牛と為ると人供養を契る子い二八の候陽い三
四の旬に云ふ此文のおろい織子十六歳候陽十二歳を
支過まるを五月を忘れ二月を愛まるとて涙を流す

是時候の景色 二

かくるる野川流る秋の風
月の夜の遠き稲妻

赤白野川の秋風とふかるる色とる月の
まるる景らたる夜の稲妻の隠き光
こあるを我打添しる蓮向の作 二

是八体白天象 二

月の夜おろの遠き稲妻
作き見とく人おき車沓し戈

赤白の景色を見過とく秋の夜のう物
妹しく体こ景殺しから車と稲向を
空あの何をのきとく見るとふ海こ情
を起せしあるを

是前白の域をとる法 二
附る起情 二

作見とく人おき車沓しき
今やおの何をつ長し
赤白人おき車とるを哀しを

月の出るを待とく里に行晩い月の入を惜とる事に
上る伯陽九十九にして死を越子除く歎て月を形見と
なるなり或夜伯陽婦と共に庭に出て越子
蘇歎く百三歳に死せり天の星とあり天の星と為く天
此河とく水を行銀河を望とく川を隔とり去るとも帝釈毎日
さに鵲を以て七月七日い帝釈善法堂に所参の日あれ
ば水を渡しあり渡しして渡るを許さる年三度と云へとも
人間の為に一日一夜あり此時烏と鵲と羽を合へ橋と
して彦星織女を通せ二星を鵲のもしと云 大和本草 鵲と織内東地の国に去るし鵲此多し鵲鵲多
来りしあり云ふ鵲島と云所に山くつくるとう大二羽と
黒白何るを尾長し

### 兼二 秋物 カネ

### 鳳来紅 カウライ

葉難頸、時珍
日鳳来紅芸葉藤子と共に鵲鵲に同しを葉九月鵲近
二星を望とく花の如し好を名つく呉人浮く老を年と
も一種を月葉紅の者あるを十様鵲と名く
鵲須や唐の来る時珍 時珍曰鵲
桂 カキ 大葉にて固く光沢ありを四月花開
八九月実熟を種類多し

### 紫山子 カシ

見送りてそらハ殺し君なすく綫盗出
まして趣向をも立る其の旅とも白作せ
しなり
是なる白の情を抑出せしと云附ニ

今やおもの旅まつらし
涼ふしきなきちる眠寝ひつ
饕（モダイ）の花の知らくとおる

打まし〃の白き旅まろくさまやと思ひし人をと女とも見送りて涼ふしと顔向せしなり 桐阿（アミ）滞羅（スラ）ハ比除（ヒエ）して云る詞ニるなくいかの酒香きたおとくいふ昔の盤纖の至領の影く紅 或ハ法ノ蔵入道なとゝいふ人さ事盤の前なとの涼外とも見まぼし 次ハ去湯のさるを見送りて酒を旅ふしてうゆく宴入たる人の批もと身とさ擁深といける撥の多のちくそをむしを盤向して脩しなる桐前白さ眠をふ寝ふとのふ涼ふの女なとゝも見て情桐なしくく旅くひしまらんと手す綫をなの主ちつけたる答力知らくと對かなれまなん驚る

彈、鳥却、【和漢三才圖會】藝文類聚ニ云古者三皇の
僧都、添水、世ニ云人死して未棺椰殯葬ゆくに畏まく白茅を以しまきてを中野に投も孝子之禽獣の食ふをを視るに忍びす弾を作り以てまもを守ると鳥獣の害を絶つ樹る家山子今田圃乃中ニ草偶と弓を持くせ以て鳥雀を防ニ備中西陽川寺の主賓僧都迹を民間の奴ニ偏ましてへ田ニ入鶸を護り以て鳥雀を驚かしして勢とも今ニ至くるも雀を懼まも豊霊を僧都とも【讀古今】山田守る僧都の身こそかなしき秋さくぬれハとふ人もなし 玄賓【僧山の井】そをつハ添水と書て水田ニ在る水の力を添へて音を出る鹿をおとしなりかくしとハ別物ニ【石川丈山覆醤集】竹箇尺餘上短く下脩し桔槹ニ似て首を下流ニ矯させる故尾に石を敲く旋轉脩仰我巨々の声を発揮も【蓮心院云我巨巨ハ竹筒の鳴声なり】一声頻允なるにこヽニ是添なり

## 鐮帛（カヽシ）
【躬恒秘藏抄】家の中に薄をみるのをたてて又ハ庭の田をも秋の二是を鐮帛と云ふかしニ我宿のかゝしおんなるもしすや小山田さ床の



余情ニ近白の附ハ切出かりへさ〃〃涼ハ出ま東のとらふハ此様なとむりんふなかしにく蕉門の附白を初とぬるのハ此骨頭を見て西桐附をむかあすらんやら一句ハ何でもなんの白のよふを見えるきして發を実さよう意なあさ事ニ此を味をまく学べく社ハ附合のおろしきをつんでも今とまつ車る如ニ

右以上連綫之解ハ掩する事の俳諧之巻まるを抄出して引用せ全篇ハ子の集成堅僧し考可

○名所地名遣附之事

觧
ちなみ紙さ数の連ある書傍て
著ちみ人にて三井の鐘か

又
伊勢の音頭も忘まうきとおる
難波江の風身く近を月見舟

附るハ元の此とのこくるどもくぞ一ツる等る一ツハ現在ニ

## 烏鵲（カサヽギ）
文婦相係りをしの䪽をて存るを云

## ㊆ 織女祭（タナバタマツリ） 牽牛（ヒコボシ）
【五雜俎】牛女の事齋諧ニ始り武丁の妄言成博物志ニ成る擬ニ至るの浪說千歳の下ニ婦人女子傳へく口実とまるとて可なり文人墨士乃摺ひてさ事語ても天上の列宿をして擬之汚濊を被らしむ亦怪むべきの甚しきにあらずやと云 其れとも誌ニ有へ連（タキモシ）俳の道浪說ニ云くとも用ひまんハ有べしに ● 薫姫、織女の異名ニ ● 糸織姫 ● さゝら姫 ● 百子姫 ● 朝貌姫、以上相撲七姫の内ニ ● 短冊竹賣、むかしハ七月六日市中梶の葉をうる明夜詩ニ書まるく二星ニ供も今ハ民ゝの兒女五色の紙を剪りて短冊とし書まく古詩を書並の繋ぶそむ高く屋上ニ出を竿竹竿の五綵るふを掲るものなり昨今市中短冊竹賣多し又五色のるをさくきを賣

## 七夕踊（タナバタヲドリ）
小町踊。【選環紙料】正保の頃亜巻之七夕踊の歌を載せさる其詞書さ云物も七月七日ハ云竹莫とて人三人今宵ハ七夕祭まるとて浴めるしころに七ツ八ツまるまあるを小娘たちら美しく出てまつ大鼓を手に海ニ持つまき両ふくうちて踊まいるも三ちなる是七夕を慰むる事昔今さ恙

○畳語之事

海棠の花を根皿花の後に海棠の枝きり花

題目踊 法花経自を置く通を云 法花経題目を唱る故題目踊と云

霊祭 灵棚、掛素麺、麻棚、經、柯著、枝豆、枝豆、根芋、青蓼、麦、抽米、瓜、茄子、此類聖霊を祭る

鷹の堺出 和漢三才図会 四月羽毛を脱し新毛を生ず 鷹打、元七八月鳩を



花の咲うかくれ世を忍ぶ人

世に居川に人群る事

前の歌の意なり花に成ぬ人は山にして月を待いるまも大海の内代にとゝまりし白に成白いそれをうけていろまも太平の内代に群あり人群る事に成ぬ人群る事に成ぬ人群る事に成ぬ

○花前に名月出る事

其角集花鳥に巻中に

名月日もし酒むく人

かゝる世に世と主に花降て

前白酒むく人とゝふ俗に云坂迎

とゝ故に名月を酒の人をむかへ主に

日もしと上に乗て主に花降て

かゝる世に世と主に花降て

十五夜月の那に夫人の月に天降て

かゝる世に世と主に花降て

常より二月人のうなきを悲まれ

守らしめ人とも給て羽衣を打着

以て竜宮に入て世を忘れ自分を求る的事に絶崖断巖の奇樹を度る事巖窟の辺に小蓬を結び所に鷹の巣を窺ひ獲計に作る是試鷹打と云

鷹祭鳥 月令 鷹乃祭鳥 處暑候七月之中也

玉川き 大和本草 其実は梅雨に似り 花を好む人七月七日花

兼二秋物 龍田 姫 風江入楚 竜田姫 神名帳 竜田山の神 竜田山の神 竜田山の神

爽氣 [illegible] 漢和の篇に云爽は秋の気 [illegible] 爽は清快なり

田の色 詩経 説文曰

芒 白き穂なるて鷹の羽に似り

端二月始て生じ八月熟す云 [illegible] 八月は

せ車さらつして天上せしめりさる白を花ふりてこ一句を作りするに是を集るハ俳諧に古今未曾有の佳句とこそ存る事の手段ニをなさ可き紀事も其可らはさらさらく翫味すべし

## 和歌体風躰

### 短哥

もとく長哥に短哥あり短哥の名目ハ三十一字の哥をも短哥と云しこともあり

うらなきもののかれまれ中の友とすれば猫うは湯まくくさうきては似ぐくまたあらぬものはちきては似ぐくハなきはやうの花の咲る世をいまより思ひうへてきはるとは道したきうに花をこのうちし我は身はさゆきけんとも[illegible]すひハせむ[illegible]花に眠る鳥

### 旋頭哥

是万葉集あり哥二 三十一字に今一句を添ふるなり

うちやうくはなきうくさ人さとのもうきまきそのそまのに去らくさけるハなくのそあのそれも

是ハ果ニ七字を添へたり

かのあらさ萩ちるをのこ去らなうへそなりつくも[illegible]さむつまれくさうさせむ

是ハ中ニ五文字を添へるも

すまらくミそよのあるかけさむられおくうへる何ぞてその去るのむきるふさあふさくちらの

### 混本哥

三十一字のうち一句あきなりこなたにてもかし

是ハ中ニ七文字を入る前ニ又ハ五七くあちくあるも古ハ五ハ首さちうきもあし我夕ありくつくるもいくく是をせんともくへらは

我うその夕うけやさま花やまくさ花の世そかし



---

（つ）

**机洗**（ツクヘアラヒ） 硯洗、

さるやう即ち清く快の義也 [蔡松年ガ詩] 爽気滌出千林赤

是ハ童七月六日ニ机硯を洗ひて小野の神事ニ做ふなるべし小野ノ社ニ於て六日ニ机風の硯を梶の葉をさはへて崇信を致ニ机硯を洗ひ清め小野の神ニ梶の葉を

**妻迎舟**（ツマムカヘフネ） 妻迎舟、妻送舟、

手向もなく二星の事ともの也を妻迎舟とも云へり

**衝突**（ツト） [續博物志]

いろまきも二星天の川をするとのあり 其事あり雲志をうくやかしの数 [韓非]

**入**（イリ） 十六日 [隋煬帝雑志] 昔ハ祇園まて法と入ときく家ニ秘蔵せる器物或ハ家の嫁娘妻妾まで事ニ見てさと思ふもの女客殿居間ニ限らば涼しく入て遊さ見し近江ます勢州山田ニ有りし也へ世人出の入とかれ傳ふむかしも祇園ニありし也総ゐく家財の数を蓄るハ貪欲の道ある故是を懺悔の為となり

**辻相撲**（ツシスマヒ） 公事ニ相撲は[illegible]かくまとあるをいふ

せしとふ今世紀くあさことなり

たくくハ禁裏御神事ニ相撲を行ひ里神楽と云う如し神社ありとある事の相撲なるも禁裡の相撲ニ倣

兼三秋物

**露**（ツユ） 露けき、露の玉、ハ陰液之液 [月令章句] 露

て秋とあるや[illegible]

（ね）

**願の糸**（ネガヒノイト） 乞巧とも云 [公事根源]

て露とるるを結ひて霜とあるありとそ

こく庭上まて車起ありて七夕祭てものありて香花を供へ庭上にふさを紬きつて竿の先しニ五色の糸をかけくニ事を祈るニ三年のうちニ必叶ふといへり 乞巧とも云 [朗詠] 憶得少年長乞巧竹竿頭上

**念佛踊**（ネンブツヲドリ） 洛小川合村一念寺村ニ念仏踊あり念仏を唱へて踊る

頭糸多、白居易

（な）

**七箇池**（ナヽコノイケ） 百箇池、[韋林廣義] 戚夫人傳云高祖漢宮七夕ニ百子の池ニ臨ミ五絃を以て相羈を是を相憐愛といふ七箇の池とハ星を祭るに七ツの盥を並べ是に水を入れて鏡をつけ星の影を写すをいふ七箇の池ハ天の川をもて百子池といふ

**刀豆**（ナタマメ） 叶豆白莢の形を以て名を命も叶豆ニ似て稍長し五六月紫ふ花を咲く [大和本草]

**棗の実**（ナツメノミ） 妻葉を生し莢を結ぶ長き子の天さ近きあり

是ハ下の七文字なき也
岩の上に根ざしゝ松鼓とのミにて そ
ぞふたゝび経ぬるものを
是ハ中の七文字なくて末の七文字
なき也
句ハあまたあれど文たくひもなく小
町の歌かゝる体の物ニ善悪なと何数
なき詩の上のしも見えず只古今序
ニ一の歌とらくるさまくありと

## 迴文

是ハ逆さまも同じやうによめるなり

むらくさにくさのなハもしそな
はらはなそしもはなのさくに
さくらむ

## 誹諧哥

是ハいにしへなるをいふとかハれんきしき歌をとりあつめたる也 人ハしらず作者ハ未代の人 誹 可定

又後拾遺千載集に入れるハ狂
の事あまりに寺の歌多のふきやかなん

但し是を知る目に定まる也 古今可見とも之

誹諧有様々 一俳諧 二誹諧 三俳読 四滑稽 五誹諺 六迷字 七空戯 八鄙諺 九狂言 此事子細未弁之

## 折句

是ハその名を一字づゝ上におきてよめる也

をくら山。みねたちならし。なく鹿の。へにけん秋を。しる人ぞなき

是オミナヘシの折也

## 折句沓冠

句毎上下に文字を入れてよめる也

をのへなるすゝき。秋にはなりそ。
もなしつるまもなきかしるしけし
きか

是ハ女郎花を花を惜しむをしてよめる也

---

むなしきなつめとい 時珍曰 梓まらるゝに陸佃埤雅にいふ 大なるものを棗(サウ)といひ小なるものを棘(キョク)といふ

兼三秋物

### 梨子(ナシ)

時珍曰 梨樹高さ二三四尺 尖 葉ハ白く光沢あり 二月花 さらき秋 子熟す

### 鳴子(ナルコ)

鳴竿、 秋の田畑にかけて獣を驚かし鳥をおどろかす具なり

### ら

### 蘭(ラン)

宗奭曰 葉麦門冬のごとくして潤く且靭なり 葉長さ二三尺 四時常に青し 花黄緑色 中間瓣上に紫の點あり 春芳しきものを春蘭といふ 葉と共ニ色淡し 秋芳しきものを秋蘭といふ 葉と共ニ色浅し 其く時満室悉く香し 他花と又別なり

### む

### 迎火(ムカヘヒ)

送り火、 七月十三日家々に門にて都鄙ともに麻木を焚て迎ふの義なり 此時門前にて麻柄を焚て是を迎火といふ 十六日の夜是を焚く 是を送り火といふ

### 虫送(ムシオクリ)

紀事 年に依りて田に蝗害をなすとき 時民人鐘鼓をうちて野外に送る これを虫送といふ 九月年に五穀の秕養を護るといふ 茄子の根 枯るを

### 木槿(ムクゲ)

時珍曰 此花朝に咲き暮るゝ殊に日及と名つく 槿とハ舜といふ 猶槿栄一瞬の義なり 又花小にして艶なる 白又粉紅等の葉 千葉くもあり

### 室の早わせ(ムロノハヤワセ)

古今伝 律の室の室の すすまいてもしも志あるをはさんと志るう也。 此家まま来に紀伊の国室の名やかせして入いり 紀伊國に牟婁郡あり ままの名に従ふべし さて牟婁郡の早わせといふ事ハ古説なし 但杜撰なるへし

兼三秋物

### 虫(ムシ)

虫籠、 爾雅 足あるを虫といひ足なきを豸といふ 疏に云 此文に對するの敵て言ハ足なきも虫といふ 一雍州府志 下加茂の社司の婦人松虫鈴虫を養ひ籠を造りてこれを献す 鐵細竹を割りて籠を造る 内に一ツの小箱を造き土を盛り若菜を蒔き 露を草少し植る 俗に唐撫子なる 野芝白の土を以て茶せんの形を作り籠の上より垂下し 是に躑躅を植て秋に至りて虫を入 様々の下 招戴ハ芋の掛蔓ハ是を見て日を悦ハし 夜ハときを聴て耳を娯しむ也

### 虫合(ムシアハセ)

虫の声をよしあしをあはせくらべていふ

すゞしさにまぎらはしくもさくはなの はなのしたにもさくらはいふ 是そてや

是ハ花をたらねくさなやと云ことをいひかけたるなり

# 物名

是ハかくし題也

うち日もさすみやこにさかる古 せりハなくふねのともにさかん

是ハ海の宮といふ事なり

# 贈答

是ハおもを遊もとむ事ハ黎 阿しことゝ云なり

ほそめとも袖にかゝる白露の玉を 人をまちの日のなきに涙をや学

返シ

おろかなる涙そ袖に玉をなす [illegible]

ぬれハせきとめ人も関川 [illegible]

## ㋒ 盂蘭盆會（ウラボンヱ）

日本紀 齊明天皇三年七月始て盂蘭盆を設け同五年勅して盂蘭盆會を諸寺ニ下し講せしむ 釈氏要覧 盂蘭盆云ハ是釈氏の孝を述へ恩を報ひ苦を救ふの要なる目蓮の母をすくふをもつて始とし梵語ニて盂蘭ハ倒懸と云盆ハ器なる也

## 欝金の花（ウコンノハナ）

時珍曰欝金ニ種あり欝金香是花を用ふ此方の欝金ハ根を用るもの也苗ハ薑ニ似て根大小指のごとく外黄内赤く人以て染るに黄を除む又微香あり又四月の始苗を生し薑黄ニ似て花白く質紅なり末秋ニ茎心を出して実なし嶺南の

## 馬追（ムマオイ）

やくろせむ の俗スイトと云 江東ニこの一ハ実ある小豆ニ似て啼声スウイと聞ゆるしいふなごに似て小二色斑なり其声スウイと聞ゆる 雌雄の異なり 青し尻ニ剣あり又うまおひとも云 中元の時夜盛ニ鳴く音緑車を挽くが如し関東の俗言ニ馬追と云

兼三秋物

## 鵜（ウツラ）

和漢三才図會 摂津ニ多く有 甲州信州下野 最も多し叢肉の産也又傍ニ

たゞし鶉ハ鶉の類あり珍き鳥のごとくにハ人甚賞玩す声を殺せ其声戸のごとく聞ゆるといふ是を賞する声を早旦日午夕暮に鳴き九声二十三声を上とし毎に早旦日午夕暮に鳴き又其声を止むる人是を養ふ 殊に中秋に至て声を止むる人足卑きニ又鳴く声 此を阿以布といふ事

● 鶉 鷹。 鶉をとる鷹をいふ

● 鶉の床 俳今 新式 を鶉の床といふ事 鶉の常にふす所なり 鶉ハ夜ある物の巣ニ鶉の床とぞいふ

## 鰻簗（ウナギヤナ）

和漢三才図會 鰻此物冬ハ泥穴に蟄し五月ニ至て勝き出ッ此的味豚り子を生む江南ニ多く名を得る 紀事 秋月鰻流ニ従ひ下るを云を簗ニ鰻と云 簗を以て是を捕るニ流ニ従ひ簗の中ニ落入故ニ捕へ易し

## ㋨ 残る蚊（ノコルカ）。残る螢（ノコルホタル）。残る蠅（ノコルハイ）

貞享式 残るといふ字ハ其季より此季ニ残るの道理なし中暑たゞし残る蚊ハ重陽ニ残る

古池之句傳 七月うのく

又あらぬ道しるべなる有わかのんなりて同し事をいふ詞をかへてする有是又かくの類也

○右ハ歌人の家の古法にして今の俳諧に入用なく殊ニ古今流行の変化を知る程ハ此類の事いらぬ事にて力の付所なれハ題の詠も物をかくし又字をかくして皆一句の興あり文字結ぶことなく俳諧ニ用ひ是を知る事の達しても不自由なるべし

○

海を流に従へ其貴の方より所に句を出

俳盃ハ家とめ盃き柳の枝 未因

もゝちの今一句と求める

御盃又もとめたき柳の枝 仝

回文

なきたんとのめや菖蒲の富田酒　其角

生者必滅不生不滅と云る疑ふべく

ちる花も又咲花の始めの野　古音

野良といはれしも是に寄る句をせなと寄られ侍りて今別義ハ聖の誓をも又ありぬと、

# 芭蕉翁古池之句傳

常州鹿島根本寺佛頂長老博覧大悟の和尚なり擬青翁藩主の師なり近来江戸深川長慶寺へ移錫し給ふ翁もまた擬青翁にしたがひて芭蕉庵をつくり六祖五代の佛法を修し先師の参学の人是に至りて茶事の中に佛法擬青翁の葉に大

庵者大小と事共小も変るまじ長老内に入近日何の所有擬青翁答日雨過青苔湿又問如何是青苔未生前春雨来未前佛法と答時洲を逃の蛙一躍して水に入る音を答へ忘れし間に蛙飛込水の音と答たり佛頂長老珍重しる深く持たれ深其意を擬青に授呉る長老も序に宗意をもちて事の音相承是附属物の至嗣来會に及学法人下一句子省法風一心法界法界一心にまて法界と一心の水音すと申しけり実に擬青翁の省悟を是法と、書き留めるものよく記せる諸家に擬青翁を奏して我が風雅を参禅の功も積て今日水音大悟の一句に佛頂長老讃明付法のめでたきを挙げおくべき

## 残暑

秋暑。〔山谷詩〕西風挽不来残暑推不去「極まえて来くのる秋の暑さかな 支考

ともに残る暑ハ行く残る字ハ経くかなし季の後とかく此論を残る字の例とすべし

## 後の藪入

後の字を断れとも秋季に連るまじ秋季とすべし藪入の事は春のとなりの注す

## 〔く〕観音草

〔まくらせわ〕茎も花も盛の葉葉にしかるべき似くおもし且葉く長し七月茎を抽んて小花をあらはし穂をもはれ春葉ニ俗中元の日蓮飯を縛る是も観音草の名義是にあり

## 常山花

〔和漢三才図会〕根を常山と名け苗を蜀漆と名づく和名久佐木處々にあり葉ハ菜に似て臭し云ふ丈ばかり葉梓樹の葉に似て口く尖り微紫あり六月細花をさき白紅雑揉る●常山の虫、〔同上〕臭ハ此木梯の中に有り蝤二木の心を蝕ふ六七月採りて之を灰用して小児の疳の薬に入る或ハ灸てもし小児に食しむ丸蝤を取の法臭ある木ハ株に必小さき穴ありて管を以て水を中に入るる時ハ首を穴より出すもするなり木を一方両端を縛り是を探りる

## 栗奴

〔同上〕栗の苗に穂を生ぜる時黒き煤の生ずる粳の奴麦の類也

## 鐁

## 虫

〔同上〕俗字螙虫正字詳ならず栲まるに此虫蝤ひ頼の獣翅青く腹黄色前脚長く疾走し里に蹴る毎に穴に出入り奴を護るとし秋の声馬の蹄の音に似たりよって名づく

## 蚣蠍

時珍曰秋月ありく青紫なるもの蟪蛄とも

## 〔兼三秋物〕葛

同根堀

〔同上〕其葉瓢蒿に楮の葉に似て両青ながら裏白く風を見ればよく飜る恰も葦を返すがごとし強風として声をあげる人の葛の裏見と称し人の根をふ〔大和本草〕根を冬月或ハ春のまだ苗を生ずる時堀て用ふ葛根なり古式八月の季とす不審〇葛の花ハおもしろき葛原

## 花壇

〔貞享式〕今按るに花壇も花畠も決して秋と定むべきに葛の家をも京師知恩院山門の南にありといへども是は葛の生する原をいふなるべし

## 花草の實

草の實。諸草のたぐひ妻毛又こ花を開くその後まて秋の末ぎにおさまるの

今さき天下に宗匠たるべしと賀
偈をのべ嵐葉子云水さきの俤
肩こてをたくさん連綴をしたへ
いまさ宿の五子等城にをを呼
是を宮へめぐ人爲の云歌もこの
事をいひつゝ志をたゝらく諸子
のこゝ篇を学ぶ雨宿を宮へめん
と欲をこ三子試さまの詩五をこ
きゝん各首をかゝふ歌を錄恩
をやゝ有て於風貴書の五文
字をいさす嵐葉を出しさと
何ふ其用記をを山受也と色
昂是空空昂是色の世をつく
してこを篇を通んとを爲つく
くとるて云云子等の詩五名
一理或舍こを不等の句を海は
きりとをふへし能年其用の
山をのをあやをきをを貴く
好しさりなをかを原五七の詩
ををんを觀相見稼の理をけれ
ををく唯この度のをの修をを

夢をを就をを
実ををを然

## や

### 柳散 晉史 蒲柳の質秋に屋く先ッ零ッ

### 八幡安居の頭 十五日 紀事 元安居の頭を大経営二起こ三ま以

前その頭人を特点を先年の年の十二月部をを翌
年十二月十五日に至りて八幡山下の郷家安居の
頭を勤むその中池中に鯉氏ある者に又十二月
八日今日百度水安居頭人の宅にあめく連所
小綱の神人長吏の補任を授けこを我指部と
いふ又十二月九日頭人の宅に於く郷家所を設
し鯉箱子あり日十三日頭人浴衣を着し奉供
をを行粧をを古風に云 嵯山の月 今八十二月十音に云

### 糒米 本朝食鑑 今製る糒米は蒸を以稗糠を去り沙りるて云を我搗き扁米とをを此を繞米と称を甚佳に蘇州莊野の市上に繞米を造る者麦粉を以て俗をつくり色を白くして四方に送る

### 灸花 ヤイトバナ 和歌 小白の花をを白微紅に児童此花をとるを唾にををし茎付方を上にして足或は頭に貼ることを灸の如依て名く

古池やとまりをさ佛ふまとをの月に
五ちつて歳しへる
古池や蛙飛こむ
水の音

妙好花を妙好人の宴て
俗世の眼ををを文地をうこ
かし宿命を窺せしめ
是をを悪魔の道をもいてく
佛をつくる功德をもるくを
をくを人九の陀羅尼西行
の讃佛歌をもをを十七字
法華をあて向上の一法を
拾に裏を法性の光ををを
て遠く天竺の仏仏をやう
今尉の俗人を山風の吉を
ををををを知をを天地風雅に茶家を雅や是風

## ま

### 曼殊沙華 大和本草 金燈花鐵色箭に云月今廣義に曰

冬春葉茂り夏月花生して葉死る花葉相衛ら
ぬ云此花下品に葉石蒜に似く一莖に花を
國俗曼殊沙華と云翻譯名義に白曼殊沙華
柔軟又赤草と云酉陽雜俎曰金燈草俗人
家にを種る云繞嫌ふ

### 松虫 和漢三才圖会 きりぎりすの類褐色すて長
き鬚股黄に野草及び松杉の蘚に在り夜羽
を張く鳴く事知呂林古呂林と云ふ虫
優美に元松虫鈴虫蓋は得くぐし夜燈火を照
を付る光を尋ねて来る我樹へこを蓋に蓋

### 蓋三秋物

### 著蒲 救荒本草 著蒲渓の辺に尚を出し一時く
風水感して鰻に変ずる
ものをこを人往こ有る

### 焼帛 朝廷秘蔵抄 焼しめとは
馬ものの尾髪をきるをてきをこを余りを焼て田に
ををりをを髪を塗く麻のをる如に此を焼帛と云

### 十寸穂の芒 玄名抄 穂の長さ一尺八寸許

雅俳温の行後也

## 芭蕉翁遺稿

### 蓮の莖

[illegible]

○

なるをいふ彼まさかぐ〻式百兼三十寸続て書ふ
てんぐ〻しい ● 真蘇字の芒、同上 さの蓮坊と
くふ心こさ蓮坊の芒てふ〻へき洞を時せ〜〜
● 芒字藤の芒、はそかの系 同上 さ〻麻のこ〻ろン
是俊頼朝臣の奇ふ〻〻〻〻侍るはまかの系を
ふ〻のくふきかふ〻ふ 摂川百首 花ま〻紀
すさ〻かの〻ふをこ〻ろうけてたえに人をおも
〻ふ山ゆ 俊頼 ○まそかの芒てふ蓮の
赤きを 松尾梨 奥州會津の中松尾の
くふり 産ふ今時の人家々ふ
搗ぶ〻〻〻頂妙寺
持と一双とくふ

## 夏解

夏書納、夏ハ四月十七日入七月十六日
解ふを夏解と云一夏九

旬の間他の化益の爲に聖経及孔子の号経自を
まのなし夏終るの後是を堂塔仏殿に奉ふ
三界万灵ふ回向を是を
夏まるあ〻〻〻といふ

## 夏解草

釈氏要覧 僧
尼解夏の日緑を以て節を束ね擅越ふ〻〻
あ〻ふを夏解草と云 大和本草 夏解草ハ麦門

## 五尺の菖蒲

旬の仕立ハ五尺の所也名さ〻ふを
〻〻〻〻

## 七食の裏

七食ハ裏七つ[illegible]

## 人の顔

人の顔ハ七穴二眉を加へる中に[illegible]

## 小鷹狩

[illegible]雜談 初鳥狩 小鷹狩

## 浮薔薇

[illegible]

## 江鮭

[illegible]

## 小瀑

[illegible]

## 所柿

[illegible]

## 木練柿

[illegible]

## 雁来紅

[illegible]

## 燕尾香

[illegible]

## 秋の初風

[illegible]

## 犬子草

[illegible]

## 狼尾草

[illegible]

## 瓜の花

[illegible]

## 蔓子

[illegible]

## 蔓三秋物

[illegible]

## 蔓三秋物

[illegible]





## 千歳不易一時流行

[illegible]

## 蔓三秋物

[illegible]

○垂門の風流を学ぶ人まい先雇の句あり。百句冬の日妻の日雅こゝの句ゝ毒を発徳を熟覧まぐし芳句い時代こゝ考ふ亀し

○初心のうちい句数をもとめむ。しかるに俳諧の名ち大山を志し向の峯へ登る雲を踏まくし六尺を越んと欲る者いまきに七尺を望むべしきれとゝんゝ又ん低きはもゝ古人の句中あるとゝ知るいに

○俳諧を中人以下の物と誤まるも俳諧を学ぶ話とのゝ学べる人指きとゝ俗語を学ぶ話をゝ学ん者ゝ指きとゝ学るゝいふ説をいふとのゝ人俳るゝ人俳すしき二俳諧い第集の人ゝ学きい学子より下土民まて味ふゝゝ唐明まくゝ中華の豪傑まも崛るこゝ所しんのいやしきを勉とゝに

○京ある学ぶ者あたり歌ゆいてにをい第一の関なきい先哲の俳を味ひ一字

こゝまむ べし

## 秋さる姫（アキサリヒメ）

朝貞姫、物語七夕のこゝあり

## 秋さる衣（アキサリコロモ）

八雲抄 秋さる衣とい秋さるこゝの布ゝ

## 天の川（アマカワ）

銀川、銀漢、雲漢、星河、河漢、字彙 天河箕斗二星の間ゝあるゝ長きゝ大ゝ竟も 揚泉物理論 漢水の精ゝ天ゝ昇ゝ上ゝ流ゝ名つけて天河ゝ云一ゝ雲漢ゝ云 宛然ゝ流るゝ名つけて天河ゝ云一ゝ雲漢ゝ云 衆星ゝ云ゝ

## 鵲鳥井の鞦（カサトリイノマリ）

握の鞦、紀事 拾遺

茂松下盛拂並枝鞦上足あの我者堂上及ゝ

地下のわゝ人多く集る

## 荒鷹（アラタカ）

鷹の雛巳ゝ巣を離て自ら養るゝ紀異雅を以捕へゝ人ゝ訓さるを荒鷹ゝ云

## 愛宕の火（アタゴヒ）

紀事 池田侍丹の愛宕火七月廿三日より廿四日ゝ云ゝ 拾遺雅談 拾遺老ゝ面影池田

新捕へゝ捕へゝ人ゝ訓さるを荒鷹ゝ云

村ゝ有る愛宕山ゝ有ゝ所謂五月山ゝ有ゝ

ゝ山上ゝ愛宕権現の社有る毎年七月廿四



日の夕ゝ火ゝ大阪ゝ山の町ゝ人ゝ見れい星の如し愛宕の神社ゝ有馬郡河原新町口ゝ有る

## 扇置（アウギオク）

図扇亟 太平

新録詩 人間 皆棄秋扇

## 朝茶の湯（アサチヤノユ）

貞享式 風炉を変ゝ炉ゝ切ゝ

ゝ木地炉縁を変ゝ新茶の湯ゝ新皇の例をゝ

## 牽牛花（カホ）

和訓 秋の角ゝ牽ゝ牛ゝ花ゝ

花を

○新茶の湯ゝ日中の

## 栗穂（ホ）

新録三文字会 蘇新 栗ゝ穂ゝ数十青栗

## 秋風（アキカゼ）

揚泉物理論 秋氣動其風清

## 秋ゝ雨（アキノミツ）

荘子 秋ゝ雨ゝ時ゝ至ゝ百川河ゝ灌ゝ注流ゝ大ゝ川ゝ

## 秋の七種（アキノナクサ）

万葉 秋萩咲ゝ

## 兼ゝ二秋物

渓流の間牛馬を辨も

有花平桔梗可伎数者七草花、萩、尾花、葛花、撫子、姫部志、藤袴新皇、秋の七種ゝ称も

[illegible]

[illegible]

[illegible]

初めて咲みをしりて哥にも俳
諧にも專に用ひ牡丹牡若は赤白
の二種あり連歌にも用ひ又
若葉の比ら花あるを用ひ又
青葉は雜の季にも詠ずる事あり
若葉の春の事は諸書に見へず
雜の季に成ぬ

**乞巧奠** 名目抄 今の俗
キツカウテンと云ハ不足言なり一説かせの
ハ人こゝを乞巧奠と云ハ乞巧奠を願ふ意
夕べ瓜を祭を視巧の多少を卜ふ事
乞巧針 前楚歳時記 七夕に婦人七孔針を穿ち或
ハ金銀瓜を針に代て瓜果を庭中に陳ぬ巧を
乞ふ 荆楚歳時記 七月七日帝宮殿の内を掃除し雲母の
帷を張り玉の華の燭を燃す西王母降り
九華の帳を張り玉の華の燭を燃す西王母降り 三輔故事 燈蕊
ことを願ふ 漢武内傳 七月七日帝宮殿の内を掃除し雲母の
紙燭を点す 紀事 七月
俗說道 山伏の宮籠 大峯より京へ出る
の道の峯入の法華山伏修験者の
峯入の法華山伏修験者の

**禁裏御燈篭** 雲笈雜說 常世の国に橘の実あり秦始皇の時方士徐福
を遣はし求しむ 三輔決録 漢の宮門方士燈篭
を献ずる 寄巧童謡 寄巧童謡を踏めば花る人形等の
美を

月七日の小祭会をとりて哥にも俳
諧にも專に用ひ牡丹牡若は赤白
の二種あり連歌にも用ひ又
若葉の比ら花あるを用ひ又
青葉は雜の季にも詠ずる事あり
若葉の春の事は諸書に見へず
雜の季に成ぬ

**七夕祭** 七月十五日の小祭会をとりて哥にも俳
諧にも專に用ひ牡丹牡若は赤白
の二種あり連歌にも用ひ又
若葉の比ら花あるを用ひ又
青葉は雜の季にも詠ずる事あり
若葉の春の事は諸書に見へず
雜の季に成ぬ

**清水寺日詣** 十日 京の清水の観音に詣人参詣を夜に入て参詣
する事なり今日の参詣百度の子度に詣るを云
東京の風俗歳時記 七月十日世俗清水
坊の前に亀井の水あり白石あるの水を号す
白河法皇の上東門院当寺に詣し時この盥
に亀の形あるを見て白石あるの水を以て亀井の
水と名付ると云 ○七月十五日世俗清水
寺に向ふ 清水寺縁起 ○七月十五日世俗清水
寺に向ふ 清水寺縁起 ○七月十五日世俗清水
寺に向ふ 清水寺縁起

**経木流** 十六日 摂州四天王寺の東僧
坊の前に亀井の水あり白石あるの水を号す
白河法皇の上東門院当寺に詣し時この盥

**迎の峯入** 紀事 七月
の初大峯
大峯入る事を頂の
峯入ると云

**桔梗** 時珍曰桔梗結実して
枝直上ること
桔梗の根結実して
草の根結実して
山蛍及び
人家に
花と
花と
花と

やらしく花園に廣くしてまたあるべきいとぶとしたる秋の
ままにまかせたる故なるべし
**蕎麦二秋物**

**霧** キリ 宗雅孫炎註 天氣下地不應而霧霧之二字雖同霧霧之變異霧霧之變異
和漢三才圖會 霧 霧の二字は霧の變異なり霧霧の變異なり
秋月盛んなるときは草木潤ひ粘るがごとく霧雨より烈しく
霧は草流草木潤ひ粘るがごとく霧雨より烈しく
峰に秋の夕は土のうへにまく霧
霧は春夏は霧と霧雨と霧の二字は霧の變異なり
霧は春夏は霧と霧雨と霧の二字は霧の變異なり
霧は春夏は霧と霧雨と霧の二字は霧の變異なり

子西松。

久世　雲、坂

西院　社、里

柏里　武

美豆　中殿、殿、里

一以上山城國

奈良　旧都、南都、國府、さらし、

巨勢　壁

佐保　川、杉

三輪　社、杉、素麺

國栖　翁、魚、紙

輕　池、市

題するの稿の幸あり或説ここそ
ここさン雲美こ水むくる心あり

**詣**　江州長等山崇福寺又蓮花寺地福院を大津の側にあるを園城寺又三井寺と称を西岳こ美泉有

**三井寺女**

天智、天武、持統、三帝即位のとき此井の水を汲く
浴湯を奉る〇後こ改て三井こ作る

是三皇の浴井龍華三會の義こ此寺平日女人結界
の山あり只七月十五日女人参詣を許せり女

詣くいふ昔

**御狩山祭**　穂屋、廿七日　信州諏訪郡

今在記　上源行ハ建御方富命下の
諏訪ハ八阪入彦命〇或説こ御射山の祭ふるハ芒すく
神殿を造るこ多人の家も祭の設ハ皆屋すく
作る又こくこくこくこ

▲以上近江國

子賀　浦、恠竈、

十符　播、菅、蔣、

▲以上陸奥國

木會　接笠、呼子鳥

諏訪　社、湖、氷、八ツ目鰻

▲以上信濃國

由良　湊、子彩長者

与謝　天橋立、内ノ海、入海、切門文殊、

▲以上丹後國

富士　山、高根、雪、烟、裾野、牧狩、

二保　浦、松原、恠家

▲以上駿河國

不破　関、坂庇、

一　美濃國

佐野　池、雲原、

一　和泉國　俊聖海ノ上　大和合　丹後ノ上野

賀古　川

曾根　社、松、

▲以上播磨國

那智　山、三重瀧

一　紀伊國　浦、

鞆

一　備後國



枝を延り時々首を出して嫩葉を含ふ其色
を動うごくも養蚕する家に似たり 蚕出説 蚕
このむしの声の如泪つゝあまきをなめるをむさぼりて
なくいと孝子なるものゝいとつくて鬼の子あるん
情女うの業のさだめなやす鬼あるもの皆陸を父
しして辭あるも汝ハ乱の辭あるん乃ち母〇蚕説云
このむしの鳴ごとく有ハ秋之

## 七夕 七日の夕 シツセキ

一ジ

円令廣義 焦林大斗記云天の河の西星

## 星 セイ

牽牛、織女、犬飼星、河鼓、彦星、たなばたつめ、

織女と牽牛世と雙星と云 ●二星の屋形、唐の天宝年中宮中七夕ニ彩線を以て結びて樓閣をおもうて其を設け以て牛女の二星を祭る〇女郎花いとゝ美
天の川の東に星有も微ことして底の下に行りこゝを
なる煙くゝしして孝と倶に出つるを蓬ヶ嶋と云

二七夕の機を織さ花を折瓜果を備く空蔬まくの
ことく行り ●七種の舟、七種の舟ハ西ヶ の宝を七夕
舟ニつくくゝ向るをいふ
七夕ノ七つの数を用ひ 新吉原燈籠 シンヨシハラノトウラウ

自一日至三十日、亨保元年江戸吉原の遊女玉菊ゥ追薦の
例ことゝ世中の所の揚屋名妓義を出せ是人
ゝ
ゝ
ゝ

三字

北野　聖廟、梅、新向松、

大内山　梅

平野　社、夜梅

貴布禰　社、川、螢

愛宕　稚ヶ原、かいつけ投

鞍馬　僧伝爺、雲珠桜、炭、木の葉漬、石、番茶、

伏見　里、搗衣、網舟、酒菓物、花火、

木幡　冥、里、茶園、

梅津　宮、川、製紙場

桂　御所、川、鮎釣

高雄　幻窓、硯石、打盤、鍋、陶子、足袋、

又ゆくすゑ二日を経て再び是を搾る法用きく多し

**兼三秋物**

**篠**（シノ）

**芒**（スヽキ）　宗祇曰志のもきといふ説ありて如薄をつゝむ●綴芒、縦に白文ありて長きまくきをいふ

**忍草**（シノブクサ）　志園翁云志のぶ草は和名抄の苔の類なり垣衣を志のふとよみたる古き築地打さるゝもの端古き軒端あるゝ苔をしのぶ草も○後撰酬帝の廟の前にて一内廟年を経て恩ふは何を志のぶ草　芭蕉翁

垣衣　垣衣を志のふとよみたる古き築地打さるゝもの

**鹿**（シカ）　格物論鹿の性淫烈多し雄長雌を別つ一子産して養鹿となる五百年にして玄鹿となる玄鹿化して白鹿となる麋なり麋なる麋なり

大和本草　鹿の角は春生し夏長し秋堅く冬脱牡鹿は冬長き牝鹿は冬短し七月末より八月の中さんし九月末より冬長し●鞍馬、麻の呉名二●鹿笛、猟人麻角の根及び胎鹿の皮或は蝦蟆の皮を以笛を作る●鹿垣、此獣田園に出て穀菽を食ふ農人是を防んため垣を設くゝ

**鶺**（シギ）　陳蔵器拾遺鶺は鶺の略なり也書く此鳥長し汎蓬の間に在て鶺々音を為す村民云田鶺の化する処○時珍曰今田野の間に小鳥あり尾ふらさるゝ鶺鴒の二字を製す

和漢三才図会　物類称呼俗に時字を用ひ鶺鴒を俗に時鳥と称す●鶺鴒、辺原中に時のあり居て動ゝ尾を振て時の正面を向ひ鳴くを七八間隔て竿鋼と回り最初は大鶺鴒過て段々近寄るまゝに時々止ゝ七八間を近くあつて竿鋼を投てとる

●時の網投、和訓栞鶺鴒の略なり音ゝ

和漢三才図会　時の字を時と俗に時鳥を用ひ蓋田を百網投とも数投とも暁の車ともいふ

和訓栞　時鳥の俗字

和漢三才図会　時鳥、時雨、時雨の宿、時雨の雨、時雨の雨、時雨の雨

御室　橋、紅葉
東寺　塔、牡丹、芹、芹、
以上 山城國
春日　社、里、野、もくろの道、春日野、鹿
泊瀬　川、寺、古川のぐ、黄之橋、牡丹、
十市　里、衣うつ、菱、厂ゑ、
豊等　寺、薄、
高天　寺、梅、ゑのもの
吉野　山、里、千本櫻、川、櫻、苦清水、帖
龍田　社、川、山、紅葉、しぐれ、
云田　渡、ゑ、紅葉、櫻
穿龍寺　鶯、時、鶴、

青嶺　佐保姫、苦むしろ
穴師　山櫻、紅葉、兎、
穿苗間　清水
賀名生　旧皇居
以上 大和國
支野　里、扇、
波敵　院、牡、梅、
以上 河内國
吹飯　浦、怪鹿、鶴
一　和泉國
生田　社、牡、籔梅
雑波　寺、浦、江、都、橋

四季俳諧歳時記新撰草

船く著くく入庵まて夏月鵜日本こゝろ久くゝ
月朝中義の華の陵こゝゝし　大和本草　筑紫こゝく猫
そゝゝこゝこゝ味
美ゑくゝ
時立秋の日京師秋の葉を賣る　一葉　桐一葉
歸女果重寄く花の様ほし載之

## ひ

## 檜の葉を戴

夢華錄唐の

淮南子　一葉落而天下知秋○一葉い桐をも拂を
もふ白体こゝるくし　一葉の舟、こゝ氣の必こ
浮ひたるを舟こゝゝつる
一葉の舟詩文こゝ多し

## 冷

雨今　初秋の事ニ

## 秋

花鏡

つけて引あし麻
を結こゝゝを拂こゝ
もこゝ川、こゝ圓箱曰こゝちをはしこゝて
秋を待くゝ
紅葉の
ていこゝ

## 文珠會

公事根源　昔い東寺西寺こて行
いる仁明天皇天長十年七月
八日大法会寺書は
めて文殊こゝ修也

## もくがら

秋藏抄ニ
出蕪書を

## 紅葉の橋

古今
天の川

## 桃の子

時珍曰桃の性早花裁安くして子
繁し故字本兆こ從ふこゝゝきを云

## 蕪二秋物

## 藻こ住虫音こ鳴

大和
本草

## 鵙

秋澤三文圓こ
形猫こ似くふ

## 蕪二秋物

## 引板

拾德抄
敲こ木
を引くこゝ鳴ぐ

名所地名

**堀江** 酪、こゝにつくし、舟きゝあり、五月舟

**長柄** 里、橋、人柱、

**玉江** 沼、五月雨、芦、かゝる、

**鳴尾** 神、浦、子多、

**有馬** 温泉、數ヶ滝、筆綱立、里、浦、子多、釜、

**芦屋** 里、山、捲衣

**瓦屋敷** 綱引、土砂塊

**敷津** 社、山、虫、

**廣田** 社

**高津** 滝、杉、峯の庵

**箕面** 神、浦、淀底

**津守**

**闘雞野** 神祭、氷室、

**江口** 時雨、宿、舟、遊君

一以上摂津國

**明石** 浦、泊、潟、蟹、笛、魚、鯛

**飾磨** 藍、褐染、

**蘇江** 酒、酪、鈴鹿、蜜、漁舟、

一以上播磨國

**三上** 百足山

**伊吹** 山、艾、藥草

**堅田** 浦、浮御堂、芦、雁、

**矢走** 歌、泊、出女

**大津**

上ゝ産し經を誦し中央ゝ稼くの供物を備ふ○川施餓鬼ハ川の縁ゝ修し法名塔婆を流す

**摂待** 門茶、往來の人ゝ茶を施す、又ハ門茶ゝ云

**施火** 大文字火、鳥居の火、紀事七月十五日今宵東船の火、妙法の火、山陣土寺の山上ゝ薪を以て大字ゝ点す此字畫元筆の及ぶ処ゝ傳く以ふ室町家繁昌の日遠望遊觀のためまゝ点せしむ故ゝ一条通を正面ゝ○一説ゝ延徳元年七月十六日相国寺川施餓鬼ハ尚始てまゝ作る是ハ軍義尚追悼の為ゝ此外北山松ゝ崎ゝ妙法の火を点し舟形の火ゝ嵯峨宮山ゝ鳥居形の火ゝ点す法ゝ所ゝの夏地ゝ点て法人麻ゝ苧を焚く是を聖炎ゝ送ゝ火ゝ焚く又施火ゝ云ふ

**燒** 大文字火、鳥居の火、紀事七月十五日今宵東船の火、妙法の火、山陣土寺の山上ゝ薪を以て大字ゝ点す此字畫元筆の及ぶ処ゝ傳く以ふ室町家繁昌の日遠望遊觀のためまゝ点せしむ故ゝ一条通を正面ゝ○一説ゝ延徳元年七月十六日相国寺川施餓鬼ハ尚始てまゝ作る是ハ軍義尚追悼の為ゝ此外北山松ゝ崎ゝ妙法の火を点し舟形の火ゝ嵯峨宮山ゝ鳥居形の火ゝ点す法ゝ所ゝの夏地ゝ点て法人麻ゝ苧を焚く是を聖炎ゝ送ゝ火ゝ焚く又施火ゝ云ふ

**仙翁花** 剪紅羅、花の形剣ゝ有ゝ小刀或ハ鋏を以ゝ切ゝ如し秋深紅の花開く数多ゝ枝ゝ連ゝ此種ゝ二むらし常ゝ叢生修寺の小ゝ寺あり仙翁寺ゝ云ふ寺絶ゝ跡ゝ形花生ゝ時ゝ人仙翁花ゝ云ふ則剪羅紅ゝ有ゝ又紅梅等ゝも云

**兼三秋物** **千秋樂** 盤渉調の曲也

栗津　松原、古戰場、唐崎、堅田、城址、寺、八重雲たち、篠、杉、時雨、

樋川　旧都、山寺、橋

長等

▲以上　近江國

浅間　嵩、遠近人、烟、山彦、繩掛、

伏屋　筆木、木賊、

▲以上　信濃國

児島　百戸、浮島岩、

一　備前國

二見　浦、岩、貝、蜑

鈴鹿　八十瀬、山、関、

香良洲　濱、焼蛤、

体源抄　千秋樂　拍子八又十六拍子　○王子降誕七夜ニ当テ紙奏也　盤渉調ハ秋の時ニ萩女房花の風く吹しくうゐ如く吹ものき二○俳書ニ子秋ニ出ものを出して万歳樂を出さん社風樂ニ漢の武帝の時出来て秋ものの辞あり　ことそ秋季ニハ一ニあるべきなり

## 水灯會　十六日

博物家ハ宮ハ殿大和田芳蘇山ハ蘇山ハ福寺ニ有ものハ華人芳蘇隱元琦禪師唐年中の建立ニ○今ハ宮ハ宮ハ宮川ハ船を浮へ数百の灯篭を点し流を流通しこれを修せ作人舟を浮へ見之

## 相撲　部頭使

軍原　史記秦の二世甘泉宮ニ在く樂を角力戲俳優戲をなせ漢の武帝ハ戲を好む即チ今の相撲ニ垂仁記　大和國當麻蹴速と出雲國野見宿禰と力を撲しむ蹴速野見ニ捨てこれをその骨を折らまくく死せり野見ハ菅家の祖ニ○先ツ二三月の頃大和以下陣の座ニ於く相撲使のことを定む洛國七道ニ遣いして相撲人を召ものを部領使と云○七月ニ相撲の節ハ天子の御覽まくあり

▲以上　伊勢國

埶田　社、八劔宮、蓬ヶ嶋、

鳴海　浦、沼、鶴、鶏、綾ヶ伸ヶ、

▲以上　尾張國

鹿島　神、鹿、常陸帯

筑波　山、神、美濃の川

▲以上　常陸國

垂井　宿、駄坂

聖上　里、茅挑、

長良　川、渡シ、鵜舟、

▲以上　美濃國

確氷　峠、坂、

○助手最手加手あるいハ相撲ハ助手ニ助手ニ是を設けたるなり　今ハ設あるなり

## 慧苡仁　和漢三才圖会

苡ハ黍ニ類し葉の間ニ枝をまとう穂を出し実を結ぶ其ハ黍ニ似て元来乃花ハ花ハ実を結ぶ其花と実と別ニ形異く実ハ端ニ白線二條を出て黍ニ似くして孔と有り上下通ず中空ハ綿をつくるべきなり

## 西瓜　和漢三才圖会

慶安中芳蘇隱元入彩の時西瓜南蛮ものの種を携来りて始

## 絵虫　和漢三才圖会

金蘭虫、月絵虫、俗ニ云絵虫此ハ蝶蝶の類ニ

## 無二三秋物

## 芒　京雅

落ものの聚ものを芒とくく壮栄ニ○芒ニ他芒の種叢生ものを恩遠ニ似く微扁く石菖ニ似く濃く秋芒ニ類ニ穂を多ク白毛細子ものを白毛ニ似

## 相撲草　和漢三才圖会

野原湿地ニ多く葉地ニ布く

一 上野國

安達原、黒塚、鬼

名取河、月の影、老女

雄島海、海士の袖

信夫 壺碑里、海、老の手枕、

一以上 陸奥國

敦賀 浦、浦、

一 越前國

有磯 海、浦、彩雲

一 紀中國

生野 大江山、鹿、雲

一 丹波國

七月之部終

## 七月

奮 立秋 節 暑 中

新秋、孟秋、文月、棚機月、女郎花月、涼月、盆秋、相月、桐秋、葉月、葉秋、肇秋、親月、建勲祭、山ノ湊川祭

小暑 節 大暑 中 土用

## 八月 ⑩

十六夜月 既望、[文林] 君やもちん之多也

ゆゝしんのつきこれさ格の新戸もきこえ給ふるも○いなせもつくしたなら中まくらくて意二十六日の月愛て居まくしゝあるくいつゝ新之 [蔡氏集傳] 羊肚菜 羊肚菜、今云兎口草八月の中濕地に和漢三才圖会 羊肚菜、今云兎口草八月の中濕地に多く生ずる子微の表褐色皺曲す樓畫ハ菜ノ白色

高野 山、大塔、中房、玉川、塔、貝殻

名草 浦、貝殻

熊野 三所權現、浦、鯨

一以上 紀伊國

繪島 磯、汐風、

一 津國

鳴門 海、海士、子舟、海戸、

一 阿波國

室戸 弘法大師、法性

一 土佐國

香椎 宮、竹葉、神楽、

博多 新羅山、常、

四季非詩歌寺記所秘抄

同上 守舎 禾を着る戸あり○田間に建る牧を追ふ○田中に建る禾を拔る真ニ竹の長短相ひ等しきもの三莖を和て上に蔓を巻てこれを傳の如し樓の巢の如し妻あるも ● 稲束、[同上] 稲束、掛稲、稲干、禾を拔る真ニ竹の長短相ひ等しきもの三莖を和て上に蔓を巻てこれを傳の如し樓の巢の如し妻あるも

石蕈 [同上] 石木耳

海に刈ほしなんちうこと孔ある樓の巢の如し妻あるも

稲束、[同上] 稲束、掛稲、稲干、禾を拔る真ニ竹の長短相ひ等しきもの三莖を和て上に蔓を巻てこれを傳の如し樓の巢の如し妻あるも ● 稲束、[同上] 稲束、掛稲、稲干、禾を拔る真ニ竹の長短相ひ等しきもの三莖を和て上に蔓を巻てこれを傳の如し樓の巢の如し妻あるも

稲小屋 禾を着る戸あり○田間に建る牧を追ふ○田中に建る禾を拔る真ニ竹の長短相ひ等しきもの三莖を和て上に蔓を巻てこれを傳の如し樓の巢の如し妻あるも

稲負鳥 [古今] 垂門に稲あつ世島の浦の海人の子ら多負て居る東くるも

色鳥 [拾古今] いろゝく秋てる中るを[雪玉] さら

桑鳩 [新撰三才圖会] 狀鳩を

一 筑前國

**松浦** 神功皇后、鮒釣給ふ所、

一 肥前國

## 四字

**玉川** 山吹、井出。山城性、卯の花、。橘俊綱、。武蔵千島。陸奥

萩、野路。近江

調布、。武蔵

毒ある、ある地。紀伊

一以上 古ツの玉川

**清瀧** 紅葉、樹、川、岩ある所、大和、

**鳴瀧** 別巻 滝 名未ある所 小芝姫、榊、

**聖宮** 吹白橋、蕨

**月の梅**

**玉敷井** 砂、月、紅葉

**長岡** 都の北、まく美濃国、時の国うき、宮、行幸、神代の妻、

**大原** 里、蕨ある、竹、尾蟬、

**除州** 里、吹ある、橋、大石邸、牛尾蟬、

**山科** 陵、月、蕨ある東、

**廣沢** 行幸、若菜、ある千ちん、

**芹川** 橋、牛蒡、石蟬義、

**太秦** 橋、瀧、石工、ある車、

**白川** 塚、社、蕨、

**舟岳** 古塚、

**化野** 

一以上 山城國

四季 非皆歳時記新採草

微曲く頃黒く腹灰青色初の末黒く赤き強なる黄豆甘美と名く俗好く豆田て と名く米と呼て春月よく熟る比志利 古末利といへり

## 伊須加島

正字未詳 同上 状蕨蕨に似て頭蕨蕨と又腹徳最赤く紫

二黄青く 物車 ちん ちゝを伊須加の黄と云

実の節、濃の節供、特怙の節。田面の節、

殊に八朝と称し又特怙の節と称し又濃の節供と云或は国の実の節と云世を又訓を伝りて濃の節供

と称し又田の面の節と云も中世蕨氏鎌の初種を

蕨裏献し又君臣明友相依て頼の義を敬君臣明

友の間を賜る義ある今日

黄賊去白帽子を着し立て蹲也

## 初月夜

或説

三四五日まてをさして いつへきを害あるくし

〇まる盆立仲秋の月ときりて初月と賞する

いと三五の月を待ところ

## 初潮

十五日の潮を云一説

初潮の初の字を

紀事 元安月朔日吉日として相

変もちて中華と同一今日

## は

## 八朔

田の

五雑組 海潮八月潮大なる

盛ことを八月の

望大盛なる

## 箱崎祭

十五日 神社考 筑前國那珂

郡此社は筥田帝の祠に博多に近し〇神功皇三度

中ハ應神天皇東ハ神功皇后西ハ武内宿禰仲哀

天皇三韓を討さんと欲し北面し神功皇后ともに

筑紫の糟屋の宮に至り 諸人軍旅を停まる所天皇崩御

ある子の親を ある 地の 宮 伝 懐経 隔月 ある ん と 乃 チ 自ら 男

の後降誕 ある と 正 辨 と く く 年 定 し 筑 紫 を 帰 り

なり して 男 子 誕 し 母 神 天 皇 是 ニ その 地 を 建て

宮 祠 邑 と 名 を 池 を 掘 く 箱 崎 と 名 ふ 此 地 に 松 を 植 て 壹

年 三 月 廿 日 行 宮 に 移 り て 宮 を

苔 崎 の 松 原 に 遷 る 例 祭 八 月 十 五 日

## 花畠

貞享式 御 年 之

四 月 三 度 二 度 一 網 を 穿 鑿 ま き い 種 く の 種 ある 事 も ある 今

すく 遠 方 ろ も さ ま り と も 何 ある 秘 事 ま れ 志 く 況

今 播 ま る く 花 種 も 花 畠 も 決 し て 教 さ

定 む べ き 〇 花 畠 は 外 花 ま き い き り

## 初紅

**葛城** 神、峯、岩橋、修験船、葛まき、山伏、白雲、赤もとゝ、赤の葉

**花吉野** 桜、寺、雲、若葉

**高圓** 山躑躅、萩、吹ゝ

**山ゝ辺** ゝ栗、

**大峯** 猪鹿、熊、岩

**巻向** 檜原躑躅、初瀬、

**葛原** 祖先宮、里、安倍の宮、都思ゝ、

**吾妻野** 野ゝ子、花、鹿、

**象山** 衣ゝ、板屋、玉藻、女郎花

**猿沢** 三笠山、吹雪、紅葉、子ゝ

**神南備**

**葉** 初出、初摘と同じ

**薄荷** 和漢三才圖會 薄荷 薄荷、蕃荷菜、

許ゝ名ゝ本綱曰二月宿根より苗を生じ清明の節ゝ茎枝分つ方ゝ茎赤き色ゝ葉相對して初形長して頭圓し長ゝ尖ゝ

**花紫** 花暦 大和地方多く藝妻薩を下ゝ長して苗の葉ゝ落金の葉ゝ紫して小ゝ又俗ゝ

の葉ゝ一尺以来葉い翻落金の葉ゝ紫して小ゝ又俗ゝ

ゝ猪鹿ゝ栗ゝ花ゝ咲ゝ

○猪鹿の間ゝ多し秋実熟せ

**濱木綿の花** 大和本草 和漢本綱万年青ゝ似ゝ俗ゝ濱木綿ゝ云

海辺ゝ生ゝ七八月白花ゝ咲ゝ茎ゝ延て白花ゝ数花

ゝ川ゝ多ゝ咲ゝ巻冊の花ゝ似ゝ秋実を結ぶ中暑

**初茸** 和漢三才圖会 陰山松樹の陰

蕈ゝ多し蕈ゝ咲ゝ

蕈ゝ多ゝ花ゝ咲ゝ

**針蕈** 同上 蕈ゝ似ゝ微ゝ長

初蕈と

稱ゝ

一以上 大和國

**高安** 里、寺、樹衣、水鶏、

一以上 河内國

**住吉** 摂ヶ原、姫山形、住ヶ丘、蛤、

**三島江** 芦、蛍、ゝ蛍、

**姫島** 汐見、小松、

**高濱** 松、蔵の毛衣、

一以上 摂津國

**宮川** 渡、蘆、岸、杉村、

**紀熊** 五十鈴川、神垣、山、宮、茅倉丹、

**度會** ゝ宮、

**大淀** 浦、浜、塩、焼

四季 非時歳時記新撰草

**白鳥** 全体白ゝ翅翼ゝ黄ゝ脚ゝ赤ゝ嘴ゝ赤ゝ

金ゝ多ゝ次ゝ尾ゝ又ゝ長ゝ次ゝ尾ゝ先ゝ来ゝ

妻ゝ去ゝ尾ゝ先ゝ来ゝ

**鮠** 和漢三才圖會 鮠い鯉の本字魚臭ゝ正字未詳狀鱔ゝ似ゝ四ゝ

肥大ゝ

し細刺あり脂多ゝ味厚味ゝ頭の扰骨軟ゝ

の如し氷頭ゝ鱠も味亦佳ゝ 大和本草 本邦東北州の大

河ゝ多し南ゝ多ゝ

佐介、俗鮠字を用ゝ非ゝ

**鯽** 鮠の子ゝ 同上 ゝ子ゝ

**初鰹** 和漢三才図会 三

**濁酒** 醪い汁津の酒ゝ和名

毛呂美今俗濁酒ゝ云

野山遊國寺地藏院の縁起ゝ云當社八人皇十六代応神

天皇の御陵ゝ安居神功皇后の遺宮ゝ

**ほ** **譽田祭** 十五日 河内國長

御代の後裔の魚ゝ於ゝ陣誕所ゝ鎧の形ゝ

誉田別の皇子ゝ守し奉る皇子矢の家を守ゝ母ゝ

ゝ出ゝ世ゝ頭ゝ

大ゝ出ゝ世ゝ

一以上 伊勢國

八ツ橋　壮若、協子、

一 三河國

庵原　松、浦見潟、三保の浦浦。

一 駿河國

甲斐根　山の中山、木の葉、壮人、雲、

一 甲斐國

繰倉　影ケ嶽、宮雄、星月夜、

大磯　虎が涙、

八重山　関、初恋、

足柄　冥、竹の下道、浮島原。

一 相模國

武蔵野　蔦、夕冥、丁、虫、花の手綱、月、

一 武蔵國

海上　海、夏麻引、かしま。

一 下総國

石山　寺、秋の月、浮島の原、源氏の君、夕ケの鈴、水、

走井　冥、清水、浮丸、

逢坂　社、一ツ松、

唐崎　山、川、網代、子勝雲、水鳥、

田上　山、三尾、鹿、雲、夕立、硯、滝、

高島　宿、鮒、

守山　

一以上 近江國

四季 非諸職特記所収歌

国藻伏の国舞を奏する世に神祖多しとて大山祇社い
と敬を納めまるの亜庸にして八幡宮の根源威験ふさ
しき大なるべしと○神祭八月十五日に
舞楽あり殺生会は当社にもあるべきなり

菩薩祭（ボサツマツリ）　和漢三才図会　舟の神を媒祖
廿二日、肥前国長崎に於て来船人船神を祭る八月北
二日なるべき菩薩祭

穂芒（ホスキ）　花芒、
尾花、芒の穂を尾花と云に穂をあしたる形歌の尾
花ばかり故に名くまで花まさきともいへ

牡丹の根分（ボタンノネワケ）　和漢三才図会　夏月川の泥をとり
晒し乾し古き畑の土と混きま
ぜ以上三品節和八九月紀き芽を出さを弱し載し
こと無数培ふ養溜を用ふること元月油搾を用ひ
てあし根の傷ふる或は鮮魚の
洗汁を灌くも亦佳なり

頬赤鳥（ホアカ）　正字未詳

狀崖すり小く脊の毛も赤崖のみし
て胸白くして嘴鬚の文なるを声を聴く
和漢三才図会
頬赤鳥
俗頬白鳥
似く細く尖し
常に芸間に棲む

畫眉鳥（ホトトギス）　同上　俗頬白鳥
狀鶯に似

大く深赤眉白くして畫の如し頬赤くして
白き間黑し背上に黑斑ありて翅尾黑く尾の
端に白毛ありて脇微赤を交る脚の下赤き
赤黑くて声聞くして多く鳴る小鈴の如ありて
者を為を鳴を聞くを足
行鈴、浜鈴の名有

〈 紅蕈（ベニタケ）　和漢三才図会　陰処
に生ずる微紅色
裏白く網き刺に在く毒ありて
大毒ありて多くの人を死せしめ

蛇穴（ヘビアナ）　月令　仲秋月雷始収声蟄虫坏戸
○和俗蛇の穴を出る秋の初雷に入る云

〈 冨（トミ）　名所記　江戸城南源川に有り
蛇の穴を開く云神体な
り

入（イル）

賀岡八幡祭（ガオカハチマツリ）
菅公の作に源三位頼政深く崇敬し
て屋敷を足利に与へ後上杉家に
なりて太田道灌に
なりて二三十年に一度行ふ

豊浦祭（トヨラマツリ）　長門国豊浦郡亀山にある神中に石神
神社啓蒙　亀山にある神中に石神
三月十四十五日の両日あり
あり天皇の所祭礼に所弥陀寺に
神殿なり海辺宮

**屋越** 時雨、霧、
**苔の原** 苔木、野、伏家
**更科** 月、搗衣、姨捨山

一以上 信濃國

**利根川** 石ゝ瀬、

一 上野國

**日光** 白雨、霧、

一 下野國

**武隈** 松、

**松嶋** 塩焼、手弱、海士、苫屋、
**塩竈** 潮、蜑舟、八十潟、松風、窟、釣舟、
**宮城野** 萩、麻、野守の居、猟人、

この部類後四日の間晴ることを得ざるを家鶴赤聞ケ浜の海辺に上る常ハ此ことなし是先帝の御祈月ニ一度里民ハ又九月十四十五日八幡寿日の西社を祭る園主より馬二疋を雇ひ競るなり是八幡祭礼

**烏頭** トリカブト 藤頭 白附子 其苗高さ三四尺莖四稜を作り葉艾に似て花紫色実蕪を作り実細小柴根の如し是本附子一物を種ゝ成熟するに云ゝ四物有天雄、烏頭、側子、附子

**黄蜀葵** 時珍曰二月種を下し或ハ宿き根土にありて生ず苗高さ五尺葉に似て花黄色大さ蜀の如し形色黄紫

**末賊刈** 禹錫曰四月苗を採る○本邦 秋八月苗を採る時珍曰本草を按ずるに沈ハ光沢ニ木の賊に云ふ如し

洛る者あるを用て礪擦に紀ハ光沢ニ木の賊に云ふ如し 和漢三才図会 物を磨に紙の如し故に一名紙草と云

**胡黄連** 千振 和漢三才図会 苗の高さ五六寸一根数莖を生ず 細くして陰湿地に生ず叢生に似て小く七月花を生ず 根の花に似て小く芳香あり○千振

一以上 陸中國

**象潟** 蜃気楼、雲の風景、

一 羽後國

**白山** 雪の下草、菖蒲の白くし、
**篠原** 実盛、古戦場、

一以上 加賀國

**岩代** 聖、神、結び松、子見石、

**神奈** 汐風、藻の伝説、月ゝの光、
**吹上** 社、松、海人、浦貝、

一以上 紀伊國

**松山** 波ゝ、浦波、

一 摂津國

四季作諸歳時記新采草

大和本草 胡黄連ハ黄連に似て大に黄色にして味苦し 世俗日本にあるなり未詳千振と云ふ秋白花開き葉ハ細く味苦き物なり是たゝりやくとふ

**除蘿蔔** 大和本草 除蘿 花の傍下に云本邦の白花千葉菊の如し依て筑紫農政全書に記せるも故に菊いとゝ云中華にも黄色なる者あり

**り**

**龍膽** 元中草、

和漢三才図会 千振に似て黄色に似て厚く九月花を生ず 後擇の形の如し上に向く花中空 ●思ふに 和漢三才図会 物を磨に紙の如し故に一名紙草と云

**る**

**縷紅** 茎葉細く彩葉の如し茎より蔓を出し八月小紅花を生ず形丁子に似て長さ五七分の花を愛し

**瑠璃鳥** 和漢三才図会 碧色留里大さ雀の如くして以巻翅

宮砂 和漢類聚、尾上綱、海苔、蓴、

一 播磨国

箱崎 神、庫、船、石つくし、

朝倉 木丸殿、天智天皇、

陳川 依人、宮、宮の尾、ちまき名所、

一 以上 筑前国

玉島 里の海、和歌山、鶴、かくまつ、

一 肥前国

雪島 嶽到松、あてしま、

一 壱岐国

五字

壱岐 若州、一休、

上巳東頬頷、聽下垂く紙黒狗後白く、蓴御尾具、蒼麦、手戸、田澤、上巳、蓴

**花の粥** 大内記田原康富日記 文安五年八月朝日乙卯、尾花の粥のことその由来何事なるか白粥

見及ぶうのし問しめ、ふいまず見及ぶ、子細をたくまじ、ひし返答、異ること 海人藻芥 八月朝

日山の花の粥白裏仙洞以下令用給良薬云々被遂調

法薬、黒繞粥、入合云々 後水尾院当時年中行事 八月の茶云

夕くの御いそし初献さ

尾花の粥ちまきの名所

**白粉の花** 和漢三才図会 白粉草

四字未詳、裏苗を生し冬、拾る、ちまき二三尺、叢生、

黏、陳、青、ちまき、墨く白鶏頭似く、微小く四、子、花

彩以後、萎、夕陽、垂く、ちまき、陳、紅、麦、五出、実、葉、

葉の木、子を結ぶ、陳、黒、麦、敷、胡椒の如くして中、

白彩、つ、ちまき、を、振く、婦人の

面、鬢、光沢、紹彩、陶、ちまき、

**車前子** 和漢類聚

懷種 寿の初苗を生じ葉地に布く、影の間のめし

年を墨、ものの長さ尺余中、穀、茎を抽く、長き穂

を作を、蒐の尾のめし 陶穀の義疏 此者苗或いは、をい

古来、もの、実を以て、八月、之部、せり、故、実、



瓜生山 古城、物部軍、陣、

秋の山 多賀国、恵、塚、

蓼の夜 蓼、塚、

**瓶原** 宮川、本津、皮、久迹都

桂の宮 月、布、ちし、曲、

**晴部山** 葉、を、山、望、末、

一 以上 山城国

妹脊山 吉野川中の傍、花の香、

伊駒山 社、越、紅葉、峯の雨雲、

**石上** 鏡の香、在原、野、菊、一、ち、唐、紅葉、麻、幣、

**向山** 市、苗の岸、市、苗、社、

**忘水**

淮べき

**落穂** 詩経 此者滞穂伊寡婦之利注云 滞ハ遺ル穀ノ意ニ収成の隙ニ拾

の未穂あらく、むの寡婦、ときに以て、利、ときの事を得

此、成、稔、つく、尽く、取らば、又、裸、寡、ものを、拾共

つまること、紙見、ちし、 列子 拾穂者行ニ歌ヲ

**落鮎** 波鮎、 和漢三才図会 下、漢、七八月、景長

さ尺、近し、此、鮎、鮒、芥子の如き者、脇、鱗、背、淡、紫

の文を、ちまき、又、の、稚、なるべし、故、鯖、鮎、云、八九月

海の水、苔の間、子を生ず、後、源、泊、して、流、随、下、

死、生、見、落、鮎、云、ちし、ものを、待、漢、を、搆、

ちまきを、搗、名つけて、下り、漢、

つ、九月、より、肉、痩て、味、劣る

**楓茵** 和漢三才

**菅大臣祭** 雍州府志 京四条の南、波、小路の西、洞

院東、この、ものも、南、小路、を、南、て、是、善、公、の、宅、地、之、所、内、小、

菅神の、祭、あり、是、菅神、陣、屋、の、地、之、故、社、を、建、て

ことまを、祭る、 神社啓蒙 或人云、此、説、菅、菅、家、の、数、

一夜、飛、梅、の、天、神、ものふ、是、之、今、之、飛、梅、の、跡、此、地、之

○摂津、摂ノ人ニ同名ナルモ

**辰の市**　蓋の名、花の民、

**辰多川**　同所にうる、摂津、家を業

**夏箕河**　御祓、摂、摂、印の条、白箕、女の条、箕うれ、

**手祓堂**　摂津、考走る所

**宮の離**　摂子堂、秋、摂の堂、さくら、おくれ、若菜、山吹、宮、業、弱故、

**摂垣原**

一以上　大和国

**天の川**　宿うる、摂、時、ちくの祓、摂、社、辻占、

**鼎筆山**

一以上　河内国

存も又説文子の完さして賞神はじめて迂生の他二説の人河内神と称も例祭八月十六日社辺の氏子是を祭る○此辺にて織る蕃の本絡を菅大臣編にて今猶作り

**苅萱**　大和本草　霸草、豆葉節穂皆草の如くして中空宿根より春苗を生ず葉に青白の花多くはじめて本末通ず四五月穂を生ず○葉集千振り苅萱とよめる後世一種の苅萱とする説然て苅と和刈葉に雀麥とよめる萱を云ふ

**萱刈**　萱、萱の刈場、

**菌桂の花**　木犀、南方草木状　江南の桂八九月花を開く是木犀ニ本草綱

陵名抄　芽　和名智　萱　和名也　大和本草　芒スキ長短一種　[illegible]　所編集の

時事ちくさ花芳宿白白皆桂ハ葉の葉語説ちくさ秋節の葉て何十年ニなるもの秋季植物ニ用ひかるしたく

図　菌桂、皆桂、の二種あり菌桂ハ葉稜のごとくして尖り特く光沢あるもの二縦の文ありて諸説あるし

存も又説文子の完さして賞神はじめて迂生の他二説の人河内神と称も例祭八月十六日社辺の氏子是を祭る○此辺にて織る蕃の本絡を菅大臣編にて今猶作り

**苅萱**　霸草、豆葉節穂皆草の如くして中空宿根より春苗を生ず葉に青白の花多くはじめて本末通ず四五月穂を生ず○葉集千苅萱とよめる後世一種の苅萱とする説然て苅と和刈葉に雀麥とよめる萱を云ふ

**萱刈**　萱、萱の刈場、

**菌桂の花**　木犀、南方草木状　江南の桂八九月花を開く是木犀ニ本草綱

図　菌桂、皆桂、の二種あり菌桂ハ葉稜のごとくして尖り特く光沢あるもの二縦の文ありて諸説あるし





**五月山**　照射、郭之、印の条、

**湊川**　楠公碑、

**一の谷**　源平つどし、敦盛塚、

**西の宮**　海神、翼つる、

一以上　摂津国

**伊勢の海**　海参、海布刈、海の海具、海藻、

**神道山**　内外の宮、百姓の私、内裏潮川、相の山、

**生の浦**　すまゝの浦、代々祭礼、宮巡り

山梨、橘麻、

一以上　伊勢国

**田子ノ浦**　富士山、松原、白し田の鶴、天の羽衣、

**宇治の山**　茶の銘名、関部の里、辺塞、夕霧、橘ノ

麻の花秀ニ氣ありて人を迷はしむ

**蓋草**　藺頭曰蓋草ハ葉竹ニ似て細く落し赤図小ニ荆襄の人煮て茶ニ代ふ

多く越前より出る深谷産用の物ニ優れる

**藺草**　竹の葉ニ似て芒の穂ニ

江城大潮の辺山中ニ多し

玉章。時珍曰王瓜、一名土瓜、子根ニ実を作し子実瓜ニ似て土瓜ニ名く瓜電子ニ似て熟

実図く長し玉章ニ云王瓜の実ハ文をもすくる

**老鴉瓜**　大和本草

似くり殼玉章ニ云

**籬豆**　本草を考るニ人家の籬垣ニ三月種を下す夏生し

て延蔓ひ竹籬を蔽ふ殼ニ沿籬豆ニ名く又和俗

殼墻豆ニ云此豆一粒を植ハ豆八升を得るニ云

墻ニ八升ニ音

近し故ニ名く

**苅菜時**　時珍曰苅菜種有

**鴈**　月令　仲秋月鴻雁来賓○時珍曰雁の状鵝ニ

似く赤蒼白の二種あり今人白くして小なる

ものを鴈ニ雁ニ大なるものを鴻ニ倉き者を

鴈ニ雁ニ四徳あり礼ありて義あり

一以上 駿河國

箱根山　冥、湖、七湯の川原

鶴ヶ岡　社、武将の林、

一以上 相模國

戀懶川　名を流れ、袖の涙

桜川　花の波、

一以上 常陸國

鳴の湖　月の影、漁、蓼、海士の釣、

鏡山　菊の露、紅葉の錦、

竹生島　弁財天、霊鷲の霊、水精岩

櫂山　さくら、

一以上 近江國

後ゝ和ふ雑也寒き時より春の衛湯之皆
熱き時より南より屠門に留る千信に偶を失ひて
再び配ふを千鶴之夜雁扁して一奴巡邏を負
ハ声を啣て溶鐵を避く千智に精る者こゝを蓼
て蛙として以千数を誘ふ是一思に南に来るくきい
痩く含ふ屠ふ人ふ時肥白故を是を愛し
○鳴金、所謂屠金とハ屠を呼ふ○雁字、山谷詩云
屠字一行書、緯音、法華経畫白　河蓼虎の文字云

櫂鳥（カシトリ）　和漢三才圖会　好く櫂杭に棲む故
俗名くかしとり云又懸巣名
夫潜屠

櫂鳥（カシトリ）　同上　正字

鷹（カシカ）　鷹潜巣防記　蛙に
好く山川に有

河鹿（カシカ）

奥の海　鶴、蟹、子鯛、荒き浜辺、

衣川　弁慶、

十符の浦　假名、あまの、菅菰、

安積（アカ）山　沼、花川菖、八重山吹、

一以上 陸奥國

京の山　少将の歌、ゆゝし神、

最上川　紅葉丹、水鳥、蓼、紅葉丹、

一以上 羽後國

帰山　都人、杜鵑、うす美、

有乳山　杜鵑、雪、虫、月、

一以上 越前國

越の海　海の月、塩、

い黄頸魚杜文魚の鷹に水鹿に河鹿と称ふ此魚
を鳴ふて河鹿と称ふ河鹿の伊豫歌に彩雲後
如雲に山鹿近江にあ多し千里地に依りて名ふ
形ハ声も大同小異に近江の名産也云て山椒
魚しに異也

（花）　冥　菅集　客又曰種特花とつゝのもの花短ものゝ
ゆゝしあるも赤黄蕊紅紫色蕊の如く色て曰見赤黄蕊の
別種ふ花ふ小く赤屋根あり　和漢三才圖会　こゝ三四尺葉黄蕊に似く
冬枯ふ春ふ深赤葉穂易愛ふ

（竜）舌草　大和　水中ふ生ふ花白く蕚のみくにして大ふ蕚ふ
こゝ多ふ有ふ花ふ車前のごとし赤黄色の子の形ふ載り

（煙）草花　花筒　花一名煙花姑紅ふ花ふ
ふ後紅を煙泉ふ傳く今地に生て是
ふ有ふ赤黄ふ蕊ふ葉ふ葉ふ
大ふ有り紫白の細花を生ふ

（蓼）の花　蓼の

一 越中国

入佐山 猟人、麻

一 但馬国

生野山 天満宮、神の別

一 出雲国

和歌の浦 玉津島、芦辺、田鶴、

一 紀伊国

大和島 天さかる月

一 淡路国

松矢浦 白う磯、志貝、

一 摂津国

和名の名称は定り難し故に其名を書あしもとに太字を書して作例の故なり

## ㋑ 年賀之称

初老 四十 強壽 仝

不惑 仝

中老 五十 家扶 仝

芥寿 仝 半白 仝

知命 仝

耆壽 六十 耳順 仝

歸壽 仝

還暦 六十一

古稀 七十 極老 仝

國扶 仝

米字 八十八 升擻 仝



蘊、和漢三才図会 二三月播種し秋実を成す蘊を采て綿を採り其汁を搾き紅白の色数あり花蘊を多く結ぶ

種蒔 元瓢の種子をまくべきこのハ採収て是を掾の下に納る或ハ中秋の上旬

韮 蔬菜を去て乾き過して褐色

種茄子 茄子 蕃茄 蔬菜を反出し蕃へ植る時種を反出し

宗懐 蘭ハ形蓋に似て木蘭土蘭石蘭有り

大根蒔 和漢三才図会 蘿蔔 大根八月種を下し彼岸の中に苗を出す

茸狩 茸の子狩、

太刀魚 時珍曰鰒魚江海の中に生ず魚の形ち物を刮裂る刀の如し故に鐵魚、勒魚、の名有り常に三月を以て始て出つ秋末に長し落して尾に近き処を短き刺有り肉中細き刺有り

荔枝 時珍曰鰒荔支、本名苦瓜、一名癩瘋、ごう時実及び茎葉相似て毒を以て名を得五月実を下し初夏を生ず蔓を引き茎葉

五瓣の形の如し熟するときハ茎葉自ら列り開き紅の瓢あり中に味有り食ふべし苗人青皮を

蓮雀 和漢三才図会 今処々に有

形雀の大さの如し頭背脇赤色翅黒し黄白の円文有る羽尾の端黒く紅を尾短くして黒し頂の上に毛冠あるも眼領の辺を黒く嘴に接む嘴を

尾を被き蓋ぶ如し雀孔雀の形勢に似て

但し春好ろ沼地伊豆地伊とつゞめし蓋蘇鶏と

字ハ音を以て物を美あり

蕎麥の花 時珍曰蕎麥 一名荍麥 荍蕎

く翅然として長く易く斜に磨く麥のごとくも殺

く蕎麥ハ苗ハ高さ三尺赤莖綠葉小白花花ハ

説文 月ハ日の照る所より生ず故に哉生魄とのゝ魄ハ日の

蔽ぶ魄より生る故に又哉生魄といふ日に当る所ハ光

月 物理論 月ハ水の精魂

大小有り月に虧盈有

| | | | |
|---|---|---|---|
| 耄寿 | 百歳 | 期願 | 百歳 |

○追善之称

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 初七忌 | 初七日 | 新願 | 仝 | | |
| 以芳 | 二七日 | 到彼 | 仝 | | |
| 洒水 | 三七日 | 何経 | 仝 | | |
| 光善 | 仝 | | | | |
| 暗命 | 四七日 | 阿経 | 仝 | | |
| 延芳 | 仝 | | | | |
| 法明 | 五七日 | 小欽 | 仝 | | |
| 室明 | 仝 | | | | |
| 檀弘 | 六七日 | 前至 | 仝 | | |
| 大欽 | 七七日 | 依新 | 仝 | | |

月見、事文類聚歐陽詹翫月詩序云月之為翫冬則繁霜大寒夏則蒸雲大熱雲蔽月霜侵人蔽與侵俱害翫秋之於時後夏先冬八月於秋季始孟終十五之於夜又月之中譬於天道寒暑均取月數則蟾兎囗況埃壒不流大空悠々蟬始徘徊博華上浮昇東林入西林肌骨與之疎冷神気與之清冷●名月、湘東記去東云三月之名月謂之名月也又名月之名月也故曰名月名月之名月也故曰名月名月之名月也故曰名月

## 俳諧七部集

### 春の日

[illegible]

二月十八日

春の夜や人丸の住吉の行幸 芭蕉

[illegible]

## 司召（ツカサメシ）

教隆卿記 司召は秋の除目なり京官除目と号す春の除目は縣召と号す各拝任の事なり春の除目は大政官の廳秋は外記の廳にて行なはるなり○月令広義曰司召定考同じく秋に行はるなり○月令

## 月草（ツキクサ）。露草（ツユクサ）

時珍曰鴨跖草花を採り好花と云三四月苗

## 燕帰ル（ツバメカヘル）

招物

## 鶫（ツグミ）

[illegible]

## な 長き夜（ナガキヨ）

[illegible]

## 名の木（ナノキ）

[illegible]

## 散（チル）

[illegible]

## ち 蔕茄子（ヘタナス）

[illegible]

## 蕈（タケ）

[illegible]

## 燕（ツバメ）

[illegible]

## 滑煤竹（ナメラタケ）

和漢三才図会 枝の樹より生ず大なるもの傘すべきるべし中なる者三四歩大小義生も濃褐色を帯て内刻あり表皆煤黒色なり安川潤之須くは煤色にして茎乃

## 中汲酒（ナカクミ）

[illegible]

## む 椋鳥（ムクドリ）

和漢三才図会 椋鳥鳥類にて[illegible]

## 椋葺（ムクリ）

同上 椋の木の上に生ず形

## う 宇佐宮祭（ウサミヤマツリ）

十五日 豊前国

宇佐宮祭 八幡宮の[illegible]





文亘のはやしの[illegible]

雨の中社角の[illegible]

秋[illegible]一度い[illegible]

俳諧乳をかくす[illegible]

[illegible]

[illegible]

花さき男の[illegible]

[illegible]

[illegible]

傘の内 [illegible] 李風

[illegible] 面朝

[illegible] 荷号

[illegible] 日重

[illegible] 面朝

[illegible] 重五

[illegible] 昌重

行春を花と弁とにいそらしえ 昌重

昔も見き [illegible] 李風

三月三日 [illegible]

冷良坂七堂の八重桜 [illegible] 旦薬

[illegible] 荷号

[illegible] 越人

[illegible] 荷号

[illegible] 旦薬

[illegible] 越人

[illegible] 荷号

[illegible] 旦薬

後巡礼 [illegible] 彼寺に

[illegible] 荷号

[illegible] 旦薬

**宇治の茶** 山城風土記 鬼道しは聖徳の宮の御子宇治天皇の御子宇治の稚郎子朝臣の日桁の宮を造り [illegible] 宇治

[illegible] 荷号

[illegible] 日重

[illegible] 面朝

**園** 三隆齋云鬼道の稚郎子崇神の心を新撰撰者

[illegible] 荷号

[illegible] 旦薬

[illegible] 荷号

[illegible] 旦薬

[illegible] 荷号

[illegible] 旦薬

**梅** 和漢三才図会 [illegible] 梅

[illegible] 荷号

[illegible] 旦薬

**藤** 和漢三才図会 [illegible] 藤

[illegible] 荷号

[illegible] 旦薬

**菖蒲の実** 和漢三才図会 本綱 菖蒲の実は [illegible]

[illegible] 荷号

[illegible] 旦薬



[illegible] 荷号

[illegible] 旦薬

[illegible] 荷号

[illegible] 旦薬

[illegible] 荷号

[illegible] 旦薬

[illegible]

一つを生むに書こと悪くく講家に興ふ鄙家
大に富貴あり本家貧し後二月二日を以て祝
時も后後本家富講貧し和歌二百二首を家僕
の変代の歌とするとこと元此を本くら後二百二
八月二日 **野分** 月令 仲秋月盲風 注盲風疾風也 **野山**
うらいはの色 俗今 うらくさること植物三旬二中暑すく
うれ聖も色の字源ハ稀なり姑稀とぞ
**野菊** 野原に多く生ずる菊に似く
菊を花に花多し稀に花ありとぞ是上
本邦にある菊に毒なり含べからずと
[illegible]人家に植ゑ聖人
[illegible]
**柔名** 春日大明神の社頭の幸名の塚下にあり聖
神四座別当仏眼院の説に種能主命ハ神
護景雲元年下総香取の宮より勧請し又武甕
槌命ハ正応二年八月中八日常陸国鹿島の宮より
勧請し天皇屋根命ハ大神ハ永正二年八月十
八日伊勢の名張より勧請し[illegible]年八月十八日を

[illegible]
日十者荷号 [illegible]
秋の[illegible]
[illegible]
別の月[illegible]
[illegible]四の宮より[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

追加

[illegible]九月　毎月亭

[illegible]

春

[illegible]

## い

**いとな草**　[illegible]

**いなの花**　[illegible]

**いぬ蓼**　[illegible]

**いぬ蕎**　[illegible]

**いぬ蕎麦**　[illegible]

**いぬ蕎麦の花**　[illegible]

**いぬ蕎麦の実**　[illegible]

**いぬ蕎麦の種**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の日**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の時**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の人**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の**　[illegible]

**いぬ蕎麦の蒔の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人の法晩秋の頃の人

藤の花たうつむいて別れを誠人
山畑の夢[illegible]夕月に
[illegible]五
[illegible]夜まそ[illegible]書 仝

夏

[illegible]その山[illegible]社尾い[illegible] 九白
[illegible]月風
[illegible]の資戸の一[illegible]
[illegible]誠人
[illegible]の[illegible]一[illegible]社園
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
武蔵[illegible]

すゝ[illegible]
[illegible]川 高彦
[illegible]
[illegible]人[illegible]月 陸奥

老[illegible]日[illegible]足常足

夕[illegible]に[illegible]誠人

**駒牽** 駒迎・望月の駒。[江次第] 水八月十五日 [illegible]

[illegible]十[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

八月を西の扉風をそそく
[illegible]

行く春

[illegible]

秋ふかし[illegible]

[illegible]

冬

[illegible]

芭蕉翁[illegible]

[illegible]

[illegible]

きくなり　若号
影法師のはつきりとしたるを嫌ふ　芭蕉
ほのぼのしいひんさんしかしら家　杜国
月中ある山ふんの姿　若号
露さへ光きくいちんもう　野水
夏の盛を嫌ふ涼しき　杜国
かすかすさらしき町さりあるる　芭蕉
二の尼さ近寄の寄りきく　野水
蝶ゆるむ　芭蕉
夏物さ蔵さ遠　杜国
今そまらさの天を鳴つ声　若号
めもとの釈迦の鼻の吸ひ　芭蕉
志賀しし志賀の名を計し　杜国
笠ぬきて世の間を歩む　若号
みちのくいせくさう唐崎　野水
きらくと鳴るしいの人の　芭蕉
鳥鳴いえもの春のうらさ　杜国
野を越せしの遠ちとけて　芭蕉
秋の一斗の月をつくまの　芭蕉
日東の李白の場に月をつく　芭蕉
ゆくさ雲をさきむ翠色ちち　若号
うしの鳴ちちの多くれ　芭蕉

蔡の西の家村の中にあり例年八月廿八日神輿二基あり一ツハ伊勢の神輿二〇伊勢の社ハ同村の西にあり

**桔梗** 【本草合璧】桔梗大くして盃のごとし赤色にして黒斑あるもの中膨の薬のごとし美膜有てこれを煎じて小子人の歯のごとし洗ひ乾かして白くして雪のごときもの切り濃岳賦云桔梗天下の奇

花水草 【本草】三七春苗を生じ夏さ三四尺葉菊艾に似て動く厚く皮失ふ秋麦花ひらき蕎金子の

**烏喬** 【和漢三才図会】今云三光鳥近年こゝにあり 俗

**三七の** 元別の名果千寿国鎮子一の如し飢を凌き渇を潤し酒を解し酔を止む

**北野祭** 四日 【二十二社註式】一条院永延元年八月五日祭礼を始む 【北野天満宮記】後冷泉帝永承元年八月四日



社国　金町の地に置綿を置きて供奉の車輦の後から
ら管絃のあり雲井に出るよし出社の古記に有
**礎** 四手打、綾巻、 【字林】直に春を精とし古人
衣打、きぬう川、角女あ翁しして一
杵をとる米を舂く如し　延喜式今昔物語に
作る製薬　てたるを搗て餅を取る綾美衣を
巻末にその端を巻て打六、きぬう
打い撥の名に撥ふ打を以て

**銀杏の実** 時珍曰銀杏に葉脚の掌に似て二月開く明年名
つく宋の初始て貢を改て銀杏と呼て形小杏に
似て核の表に白き
に開て今西果と云

**啄木鳥** 一名てらつつき。時珍曰此鳥嘴を劉裂て虫を取食ふ故に名く禽
経に曰木の有虫の蠹の如く大なる者雀の如し二面雄花の
ぬく啄足皆青色爪利く脊尖く雄の如し赤
数す舌嘴ふる尖し舌端刺ありて虫を啄食
ふ時に此鳥を以て吉凶を占ふ○昔唐の天王寺を建
し時此鳥飛来りて寺の軒を啄き損ず故に啄
の名あり寺屋に巣を
鳥ふ

**菊戴鳥** 【和漢三才図会】状目白

月もあそうの色牡丹ぬきと人 杜園
[illegible]のかるもハ[illegible]壁落て 杜園
まつくとのゝ地蔵 切所 荷号
[illegible]の世とまり[illegible]のいろめしく 杜園
[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]ぬき 芭蕉
[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible] 荷号
[illegible]と[illegible]と[illegible]と[illegible]と[illegible] 芭蕉
[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible] 荷号
[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible] 芭蕉
三[illegible]あ[illegible]ん[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible] 重五
芭[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible] 芭蕉
[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible] 杜園
[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible] 重五
[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible] 荷号
[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible] 杜園
[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible] 芭蕉

五形 堇の花 六月 杜國

[illegible] 芭蕉

[illegible] 杜國

[illegible] 荷号

[illegible] 五

[illegible] 荷号

宣旨かゝ〳〵まく綴を縫る事五
八十年を三万年と言毎年七夕の時
西東と棚の花のつゆむとき
葉の四方に上まうつ書
棚の家と賞あるを女子ゝゝる事五
弱縫と葉を洗ふ日の雨
ちやり書る扇子かさる雨と
つゝゝゝ向る糸葉の宝
賞の日は盆を縫ふの名起て
きかゝりき宮京の地
いつゝきして誠ゝ知の像
洗ゝんのきすま苦の縫事五
鄰まゝ家はゝき苦ゝうしにすり
時衣の下に縫ふゝゝ乗
ゝのゝゝ書中おゝりて
ゝゝ書四夢を書るゝ雨

四家 蕉雨

雨月秋影のゝゝくゝなゝ花ゝ

名護或ハ沙角を綾嶋しおる幾護ゝく自ら湖
中に生ず葉実ゝゝふゝを角硬くして人を刺ゝ毒
葉ゝゝある者青ゝ老ゝゝの黒し
蒸して食ふゝを味甘美なり **稔** 時珍曰茭
黍の如し八九
月苗を抽んゝ細長
栗の殻に如し **瓢簞** 百生、千生、和漢三才
書瓢簞。

**圖會** 苦瓢 俗ゝ瓢簞ゝ蘆と一類ゝして別種なる者
蒸して食ふ味甘美なり
月苗を抽んゝ細長
栗の殻に如し

**鴻** ヒシクヒ 月上 菱殼状ゝ角ゝ大なる者頸俱ゝ尾
尾細海鳥ゝ毛尾本白く赤黑しゝ色の鳥
ゝゝ鳥のきすま苦の鳥
鄰まゝ家はゝき苦ゝうしにすり
時衣の下に縫ふゝゝ乗
ゝのゝゝ書中おゝりて
ゝゝ書四夢を書るゝ雨

**鴨** ヒヨトリ 同上 状ち鷺鷥ゝ似ゝる尾長く
蒼沃色頭上の毛孔起眼の辺ゝ微赤黑を帯ふ嘴
尾青後の下白く脇黑き斑あり雌刻く常ゝ
鳴ゝを好ゝく
ゝく頭黑赤黑頸の
ゝる木の実を含ふ

**日雀** カラ 同上 状四十雀ゝ似て
辺黑ゝ白黑ゝ受る後白く
翅尾黑ゝ毛銀澤あゝ花

**鶏** ヒハ 河原鶏、同上 俗云
比和止里雀

ゝ蕉雨 ゝ家の俳を水の墨隠
ゝ五 ゝ五 ゝ杜園
ゝ杜園 ゝ杜園
ゝ杜園 ゝ杜園
ゝ杜園

[illegible]

## 舊八月

南呂律
白露節

秋分、仲秋、葉月、壯月、桂月、雁月、秋風月、月見月、

**八月** 立秋節、氷川祭、[illegible]祭、安房祭、大多祭、[illegible]山祭、[illegible]祭、[illegible]祭、[illegible]祭、[illegible]祭、鎌倉祭、處暑中

## 九月

### ⑴ 生玉祭

生玉の社は摂津の國東成郡天王寺の辺に[illegible]

### 岩倉祭

八所明神の社は洛の北岩倉村の西岩倉にあり。例祭九月十五日神輿巡行也 [嬉遊雜誌] 俗に岩倉の兎たる神輿巡行也

[illegible]





[illegible]

## 遷宮 [紀事]

凡大社造替毎年陣の義なりて時日を定めらるる勅使あり伊勢大神宮春日の社廿一年を経るとき小造替あり遷宮の時納るる所の神宝行事官司退出の日伊勢参宮の人多く京師を出づ十六日の[illegible]遷宮の[illegible]十五年毎遷宮[illegible]十一年毎遷宮[illegible]十五年毎遷宮[illegible]二十一年毎遷宮[illegible]十二年にして木引成[illegible]木曽山並紀州大[illegible]

## 一宮祭

河内國交野郡北牧方村に有祭

[illegible]

## 伊勢講

[illegible]

## 多花果 [和漢三才図会]

[illegible]

## 秋栗

[illegible]

の[illegible]して乾坤の外
[illegible]
[illegible]

元禄三乙卯　　蕉翁　越人

花見

東のもとに汁も椀も雛の節　蕉
西日のうたに[illegible]珍　頃
旅人の風かきゆく雷[illegible]れて　曲水
はきも習ふ[illegible]大切の[illegible]　蕉
月待つ[illegible]の内裏の司[illegible]　頃
[illegible]白つ[illegible]ばかりさわがき　水
[illegible]　蕉
[illegible]　頃
[illegible]　水

文政隆興あり五痔を治する薬を
[illegible]
花を栗のゆし咲は[illegible]
多く舟の擣つ[illegible]

## 色変松

[illegible]

## 巌蓮花

[illegible]

## 黒漬

[illegible]

## 波利女祭

[illegible]

## 海嶺迦

[illegible]

中[illegible]　蕉
[illegible]　頃
[illegible]　水
[illegible]　蕉
[illegible]　頃
[illegible]　水
[illegible]　蕉
[illegible]　頃
[illegible]　水
[illegible]　蕉
[illegible]　頃
[illegible]　水
[illegible]　蕉
[illegible]　頃
[illegible]　水
[illegible]　蕉
[illegible]　頃
[illegible]　水
[illegible]　蕉
[illegible]　頃

## 初鴨

[illegible]

## 榛

[illegible]

## 柞

[illegible]

## 鬼箭

[illegible]

## 朋寒

[illegible]

中ごろ出るなり　水　菊
葉の名は里のなりなるなり
はるまきく　水　菊
月　水
花もくれなゐ　水　菊
峰の方なる　水
一重の紙をむしとるべし　水
遠国の藥は多く　菊
花はいと世にうるを　水
世にさいて　水

○

いろいろの名もいろいろ　梅
なまもまきく　梅
梅の花は　菊
梅の花は　梅
梅の実　梅
梅の実　梅
梅の実

[illegible]

九月九日は節日なれば仙菊の酒を飲む事なり

[illegible]

て長郎を行

[illegible]

## り 鯉魚風

九月の風なり 李寅 詩門前流水

[illegible]

## ぬ 白膠木紅葉

[illegible]

## を 岡寄祭

十五日或は十六日 紀 年

## 豺祭獣

月令 此記

## 老母草の実

三四

[illegible]

○ 珍頃北 翁一男過八 尚学十 城人八

城下

[illegible]



[illegible]

## 逝稲

晩稲 時珍曰 獲稲 [illegible]

## 落水

芋環拾遺 国の

## 落栗

[illegible]

## わ 度會新嘗會

外

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

紙入の中美 提 正字 及 尾

[illegible]

蓋 蓋 島 切 町 夢 今 束 [illegible] 経

[illegible] 二 [illegible]

[illegible] 珍 頃

[illegible] 原 [illegible] 東 [illegible] 珍 頃

[illegible] 昌 房

[illegible] 二 [illegible]

[illegible] 尾

[illegible] 二 [illegible]

[illegible] 東 [illegible] 珍 頃

月影の海上の空は銀河 秀
世界に広くこそ見ゆる船出哉 頂
いろ〳〵として大風さしもおそれ 秀
蝙蝠の羽音も稀に聞くの夜 頂
江戸湾を花見遊客乗り合せ 秀
ひとの山猫の入 遊
軍艦の里は鹿屋せうきの国 頂
いとをかしく思ふ船の親父 秀
あ雲はいまだ消えぬ雪の山 頂
暮鐘の波打際の波の音 秀
遊女を婦人の絵を画て 頂
花を散らす酒の酔 秀
夜の雨の音に目覚て 頂
以上暮の五ツ半の時宜 秀
ものもなく山刺さるる夢の夢 頂
秋入梅の紀伊の熊本 秀
夢の跡も絶て月の微光 頂
春の日の長閑なる海の波 秀
海山の元あるくしたるもの 頂

こゝまでこの五天業の名を清く紅の子を生まれ
人家多く屋敷の部を番し ㊂

**撈ノ虫** ムシエラミ

[万葉拾遺] 是も時々ちらし式あるてしまく
あるは殿上の遊蓮とも殿上人とも掩
しく蝙蝠の羽音もかすかに聞こえ入て来る

**木蓮子** ムクレンシ 蕊 茶

曰蓮華 此樹葉末擢に似る調き花葉びて擢に
似るくこゝ中こゝ有
熟せる殿上の遊蓮のもくく
まくくして堅し俗ツフ云

**椋の実** ムクノミ 時珍曰 無患子

[歌書] 聖徳太子九ツの御歌を遠る四天王寺、法隆寺、
元興寺、中宮寺、橘寺、禅岡寺、（慶雲寺の別号寺）
池後寺、菅城寺、四寺云 [記事] 上宮王院の庭に
柳の木を修も根株の大蔓鳳文師の頃の見頃

**う** **太秦牛祭** ウヅマサノウシマツリ 十五日 [記事] 山城国太

秦神社と号も祭ふる神秦の始皇帝之 [元亨
釋書] 聖徳太子の御宮を造る四天王寺、法隆寺、
蓮華の御宮を造る四天王寺、法隆寺、
[歌書] 聖徳太子九ツの御歌を遠る四天王寺、法隆寺、
元興寺、中宮寺、橘寺、禅岡寺、（慶雲寺の別号寺）
池後寺、菅城寺、四寺云 [記事] 上宮王院の庭に
柳の木を修も根株の大蔓鳳文師の頃の見頃



# 椎義

晉其角

序

俳諧の業は古今を和歌の道の如く
時宜を世の人の一として
句の現の入れ夢を趣
さ詠ずる楽しみ世に
変の変をたしむ五倫を及ハ
も有ることを

四季 二十九 珍頂十七

時雨の降る頃の雨の
雪の降る少し所の雨の
せし頃の雨の
ふる花を雪降りまる
山鳥の鳴る頃の炭 秀

風を摩ふ神に祈る敢山の後此神を勧請せ
神宮を摩ふ山社に参る今の
牛を摩ふ神を祭る
寒く懺悔の調をして
をして
早く門の角力
[出蓮] 温泉の擢
[歌書] 聖徳太子九ツの御歌を遠る四天王寺、法隆寺、
元興寺、中宮寺、橘寺、禅岡寺、（慶雲寺の別号寺）
池後寺、菅城寺、四寺云 [記事] 上宮王院の庭に
柳の木を修も根株の大蔓鳳文師の頃の見頃

**雪の擢** ウンシウキツ 大和

**漆擢** ウルシカツ

[万葉拾遺] 漆
擢は蓮を憲く語を以て擢国をつけ
陸を発生是則ち蓮汁に裏有る
中国に於ても擢を搾る法も
九月に出せる
遠からん

**裏枯** ウラカレ [俳句] 草葉の外色つきて
文字を入るべし 蓮、蓮、蓮、蓮
文字を入るべし 蓮、蓮、蓮、蓮

**梅の実** ウメノミ 梅の

**う** **うそ寒** サム 秋の寒さ
さまるも

**の** **後** ノチ

彼西の上人の書すく人を使ふ事
なくして謂ひ給ふ事なれば
やうやうなれば仕ふ中ごろ
まれ書く仕ふ事なれども五の
とるいろ意の法社をんなる
まもさきいろ事ひの入事ふ
イウエオよくこきしてみるなん
吟声も出る自しの俗社と親乃
入なむしてそとく我者乃社の
伊勢斎戒しるる山中ごろ賜
山義を義せて俗社の神を入る
百九条に事ふ情ふ断絶の
をうふひふ澤へき幻郷に
まれをて元としてあ集を使ふて
賜ふのとふ名自中ごろ
もそのふをとる魂を合せく去集
元服のかしふ物ふる書して書

冬

初しふ色踏も山義を洋一けに色 蕉

## 社雛

[濃陸の雛祭] 和泉の見女雛遊びをよみ
古き物語にも出ふ上巳の節に擬ふは
又九月九日に貴ふ兒女多し源氏物語に常に
も雛遊びもとくふ重陽に振ふ事ふ
是を名つけて後の雛祭ふ
濃とい上巳に對して謂ふ

## 聖の宮の別

桂川の御祓。山城国葛野郡小倉山の下樫原に在
し、伊勢の斎宮昭所蓋し母
斎戒して伊勢大神宮を勤仕る此処源氏物語に
の宮と称す○聖の宮の別とは神宮寮に
ふ子供ふ
ふ母ふ
伊勢の
元禄寛延の
被を修
桂川の祓とふ

## 残菊

[菅家文章] 黄菊重陽を過る世俗之を
残菊とふ○残菊の詩八十月を百ふ

## 九日小袖

[清慎正徴記] 九月
衣類菊襲(面白

部類伊勢崇敬記新撰

ふ事ふ
ふ事ふ
ふ事ふ

政之攀緣して稍高くなれども枝を新して並び補て
[illegible]を設く是を慈の葉と云慈霞の類に

**茱萸**

[和漢三才圖会] 胡頽子枝三種有子多而実少果熟
[illegible]

大さ山椒の実の如く蕚もして下に垂る一種九月
実熟せば大き橘の子の如く蕚もして下に垂る一種五月
実熟せば大き橘の如く蕚もして下に垂る一種九月
[illegible]

**草杜丹** [大和本草] 紫
杜丹に似たり

**草の紅葉** 草の色、草の錦、草の紅葉、草の錦

[illegible]

**山魚藥** 下り藥の破壊たるを云
[illegible]

**蓍の秋** 蓍の秋を云秋の
[illegible]

**九月盡**

**山口祭** 中巳午日 因幡國古
[illegible]

部類 御歌所時詠類纂草

[illegible]

**花の頭** 廿日 [紀度] 山城國八幡山の社僧九月
[illegible]

**八幡**

[illegible]

**破芭蕉** 芭蕉翁編芭蕉詞に云此

**山粧ふ**

[illegible]

**蔕** 凌霄

**榲桲** 藏器曰榲桲樹木橘に似て
[illegible]

**豆引** [和漢三才圖会] 角
[illegible]

[illegible]

**の実**

[illegible]

**正木**

[illegible]

**はてバ志ル**

[illegible]

**檀**

[illegible]

**不思田奏**

[illegible]

**佛**

[illegible]

**手樹**

[illegible]

**佛甲草**

[illegible]

**祭**

[illegible]

**緑豆引**

[illegible]

**御香の宮**

[illegible]

**御難の餅**

[illegible]

**小倉祭**

[illegible]





[illegible]

聚集 戸之部

[illegible]

[illegible]

なりぬ雪川さゝ波や雪ぢ原 〃

住吉詣を

雪ちるや鶴屋の上の菊酒し 芭蕉

菊屋の菊をたゝえて

老衰は子も呼ぶ庵の菊を 〃

菊の日を仏の子笠をまとふる 〃 芝

海ちかくて健かい雪の鶴 卯七

ナカサキ

ぬつくとして仏や雪のてしぬき 寸木

寸亜退淳

乳のこゝろ子に世を返しうぶ毛 寸白

うら鶴も宮地の腰もこゝの内 芭蕉

雑炊もあすまいは新仏のうて 〃

一月まで寒さ来るを雑炊 丈芝

住吉詣納

東神馬や鼻息白し面の内 丈角

菅季候こゝのそもへき年はれ 順孫

例祭九月十五日 素盞嗚尊を奏し神湯の祝あり又流鏑馬ありて神輿十四日より仮殿遷し十五日本社へ還幸也

**木幡祭** 神社山城国宇治郡木幡にあり 親鸞聖人祭る

幡の神 正義吾勝速日天忍骨命 木幡の神社と呼ぶ 九月廿日神輿三基出る 或説に郡大明神例祭九月廿日

**菊の花** 時珍曰東菊を生ぜ也 九月に至て花也

神是 幡の神 〃

を鶴も長一三尺宿れるを自ら苗を生ず 根の大さ芋類のごとし 豆腐にして花をむくさきの煮

**柑子** 菓物秋多し故名を

さぶ 木の実とゝへば秋 〃

**木の実** 菓物秋多し故名を

**㋐ 榎の実** 大和本草 榎木草に榎の実と同じ 榎の実は秋の実に似る 榎の実は秋の実に似る 榎多し

**実** 大和本草 榎の実は秋の実に似る 榎の実は秋の実に似る 榎多し

**て 天王** 天王の葉も実は胡椒の大さ 秋熟して黄色味甘し 小児好て食ふ

**寺一条会** 摘み大阪四天王寺一条会は九月廿四日或は十五日の時雨 〃

例祭九月十五日 素盞嗚尊を奏し神湯の祝あり又流鏑馬ありて神輿十四日より仮殿遷し十五日本社へ還幸也

**木幡祭** 神社山城国宇治郡木幡にあり 親鸞聖人祭る

幡の神 正義吾勝速日天忍骨命 木幡の神社と呼ぶ 九月廿日神輿三基出る 或説に郡大明神例祭九月廿日

**菊の花** 時珍曰東菊を生ぜ也 九月に至て花也

神是 幡の神 〃

を鶴も長一三尺宿れるを自ら苗を生ず 根の大さ芋類のごとし 豆腐にして花をむくさきの煮

**柑子** 菓物秋多し故名を

さぶ 木の実とゝへば秋 〃

**木の実** 菓物秋多し故名を

**㋐ 榎の実** 大和本草 榎木草に榎の実と同じ 榎の実は秋の実に似る 榎の実は秋の実に似る 榎多し

**実** 大和本草 榎の実は秋の実に似る 榎の実は秋の実に似る 榎多し

**て 天王** 天王の葉も実は胡椒の大さ 秋熟して黄色味甘し 小児好て食ふ

**寺一条会** 摘み大阪四天王寺一条会は九月廿四日或は十五日の時雨 〃







ぬつくとして仏や雪のてしぬき 寸木

寸亜退淳

乳のこゝろ子に世を返しうぶ毛 寸白

うら鶴も宮地の腰もこゝの内 芭蕉

雑炊もあすまいは新仏のうて 〃

一月まで寒さ来るを雑炊 丈芝

住吉詣納

東神馬や鼻息白し面の内 丈角

菅季候こゝのそもへき年はれ 順孫

太子堂へ出仕し太子の像を風輦にうつす式

二月廿五日の

**互盛儛馬** 大阪天満宮 九月廿五日

**酒** 河内光明寺殿下向 九月九日は寒温のさゝれ身内割る

酒を温め用るもし 〃 此温酒を飲あい病を得ざるとて

世諺問答に引

**栗田口祭** 十五日 坂上の井

川越の東八大天王の祭に紙尾牛頭天王妻羯羅

龍王の女頗梨女をもとゝする八王子なる

厨子に入る八

将神 〃

**穴織祭** 十七日 摂津国西成郡池田村民家の

の神供を備へ是を神衣祭と称し社家の説に

彦神天皇寿二月縫媛を呉に遣はしたまふ

**赤小豆引** 大伝十月の中旬を

暮九月ことを奴む

**烏持** 本草

## 夏

夏の面をまもれかしこき 廿角

夏うすく雲ぬるゝや郭 〃 木芝

別録 鳥類 [illegible]

**霜寒** 時令 [illegible]

**綱代打** 藻類 綱代 [illegible]

## さ

**産屋祭** [illegible]

**逆髪祭** 廿四日 [illegible]

**皂角** 時珍曰皂莢樹皂

## 句

**栗の花** [illegible]

**菓花** 時珍曰陰佃埤雖云蔔本蘇作鞠云[illegible]

## き

**菊汁** [illegible]

**珊瑚** 仙蓼、珊瑚仙蓼二名 同物ニ栗山茶

別荘

[illegible]

**菓の酒** 宇陽の日 祝の餞料とす

**貴船祭** 神社 略蒙

## み

### 水木（ミヅキ）

[和漢三才図会] 美豆木 [illegible]

### 水無月（ミナヅキ）

[同上] 太和漢[illegible]

## む

### 蜜柑（ミカン）

[同上] 太和漢[illegible]

## や

### 山祭（ヤママツリ）

[文徳実録] 山山[illegible]

### 柚（ユ）

[説文] 柚[illegible]

### 柚味噌（ユミソ）

[醐醐] 近世編笠神[illegible]

## ゆ

### 金柑（キンカン）

[illegible]

## よ

### 四の宮祭（シノミヤマツリ）

[illegible]

## し

### 芝神明祭（シバシンメイマツリ）

自十一日 東京芝増上寺[illegible]

至廿一日、門の傍[illegible]

### 白川祭（シラカワマツリ）

十三日

[名物志] 天満天神の祭として[illegible]

### 下鴨祭（シモトバマツリ）

[illegible]

### 城南宮祭（ジョウナングウマツリ）

廿日

大和紀伊のさうれはてはし坂もしるしなし
坂まで往来の順礼をつゝめて
十番所をまゝ九ヶ所に詣
足つゝくる我のすゝしさ
法華経

つゝまてはてはし坂や五月雨 去来
髮剃や一夜の種を五月雨 丸兆
月の光や蓑うつく五月雨 芭蕉
涯もなき海原遠し五月雨 相記
七十余の老医みまちりくるゝ
五月雨のうちなくすゝそうつる
この白元るゝ老医いかす
うすしとゝきもとうしまる
人すゝきをくれいるまゝ
まゝしてしてゝ
ゝ

[神社啓蒙] 博多の社は山城国の石清水の分霊なり 祭礼の時の神一座なる故天皇、例幣の使を此地に遣る 昔神興二基ありしを此地人家七十四代なる故上古の鎧甲をして 博多鎧と称せり

## 鹿谷祭 シカタニマツリ

[歳事] 陰十月十五日射十騎師 みなくく 陰暦祭礼 寺の門前 小の方三十騎の射方同時に入詩 明神の社内 神

## 十三夜 後の月、二夜の月、豆名月、栗名月、

[字彙] 九月十三夜の月見は我朝の俗にて近世のことゝ 儒者は天道盈満一縮月又光彩遍空輪降潔 [右中記] 七十五代崇徳院保延元年九月十三夜 今年陰月 [後の

行くすゝ
法ゝみ合ゝ供のゝけ
孫をまゝして
ゝ菓の家して
麦生ゝく
川の実
風流のけ
歩須の
屠蘇を酒
大きゝ
海鼠のすゝ
月の
二夜の月
壊を
月記を
機ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
出せ
秋
製
ゝ
なる
し
ゝ
ゝ
ゝ

[illegible]

三能聖く詠る時

[illegible]

病後

[illegible]

## ひ

### 賜氷魚

[illegible]

### 瓢の樹

[和漢三才図会] [illegible]

### 穂

[字彙] 秣再び生たる稲 [古今] 刈まる田[illegible]

## も

### 紅葉

[和訓栞] 紅葉をよめり紅出しの義[illegible]

### 樝蘇

[illegible]

## せ

### 紅葉

[桃華蘂葉] 表黄裏薄芳 九月より十月まで一説に

[和漢三才図会] 陰秋その色紅又茶色[illegible]

### 紅葉衣

[illegible]

### 紅葉狩

[illegible]

### 泉涌寺舎利會

[illegible]

### 楢の實

[illegible]

### 住吉相撲會

[社家説] 神輿を出す面拍子後所傳[illegible]

子子うだすやうなるをきくつ
みのくぬぎうち去るもくく
中略りし侍る

あきくの山紅葉今やちるらん　芭蕉
水さえ月や鏡なるらん夕まぐれ　嵐蓼
ちくさらくとぬきいはしきの夕ぐれ　宗波
まくらしきや鏡なるつき若ゆく　丸兆
暑つく暑つく咲の源さうの郎　子郎
月鮮や咲の顔のうす紙　鶴雪
夕ぐれや咲ぬるかぬるの雲の峯　去来良

けしめく浪ニ入くく
雪のくも今のハ此歌ニ似くあるう之道 大サカ

## 秋

秋風や蓮をちらす花ばちす　支考

## 九月の部

九月の部

宮の市と云ハ宮の市人雑集ス宮の市と云ハ
宮の市祇園社の勅書ニ云ハ撰の事中略
宮の市弁

## 任吉の神送 スミヨシ カミヌクリ

九月廿日ハ摂州任吉の神ハ住吉の神ハ
歩行の仮殿ニ仮御所ハ殿を修造ス長を任吉ハ黄
殺と云ハ新河内なるも又兆殿ふて移ス出雲石ニ云所ニて

## 爵入大水爲蛤 スヾメ テクイスイニナル ハマクリト 月令

稲豆出雲を選て
拝ム長を神送と云

此記ス戌月之候爵爲蛤
飛物化爲潛物九月節

## 芒散 スヽキチル

ちくさ花ちるとき
繁のめくくちて

## 舊九月 無射律 寒露節 霜降中

季秋、紅樹、玄月、長月、素秋、菊月、晩秋、菊の秋、
初霜、菊の花、月、小田苅月、ながつき、

## 九月 白露節 秋分中

彼岸、社日、生國魂祭、
石上祭、
住吉祭、白峯祭、井伊谷祭、秋季皇霊祭、秋季神
殿祭、日前祭、国懸祭、△秋之部一終